

503  
27

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始





50  
2

山下信義  
村田太平  
合著

# 一事貫行眞髓

一事を貫く意志の力は  
萬事を貫く意志の力也



503-27

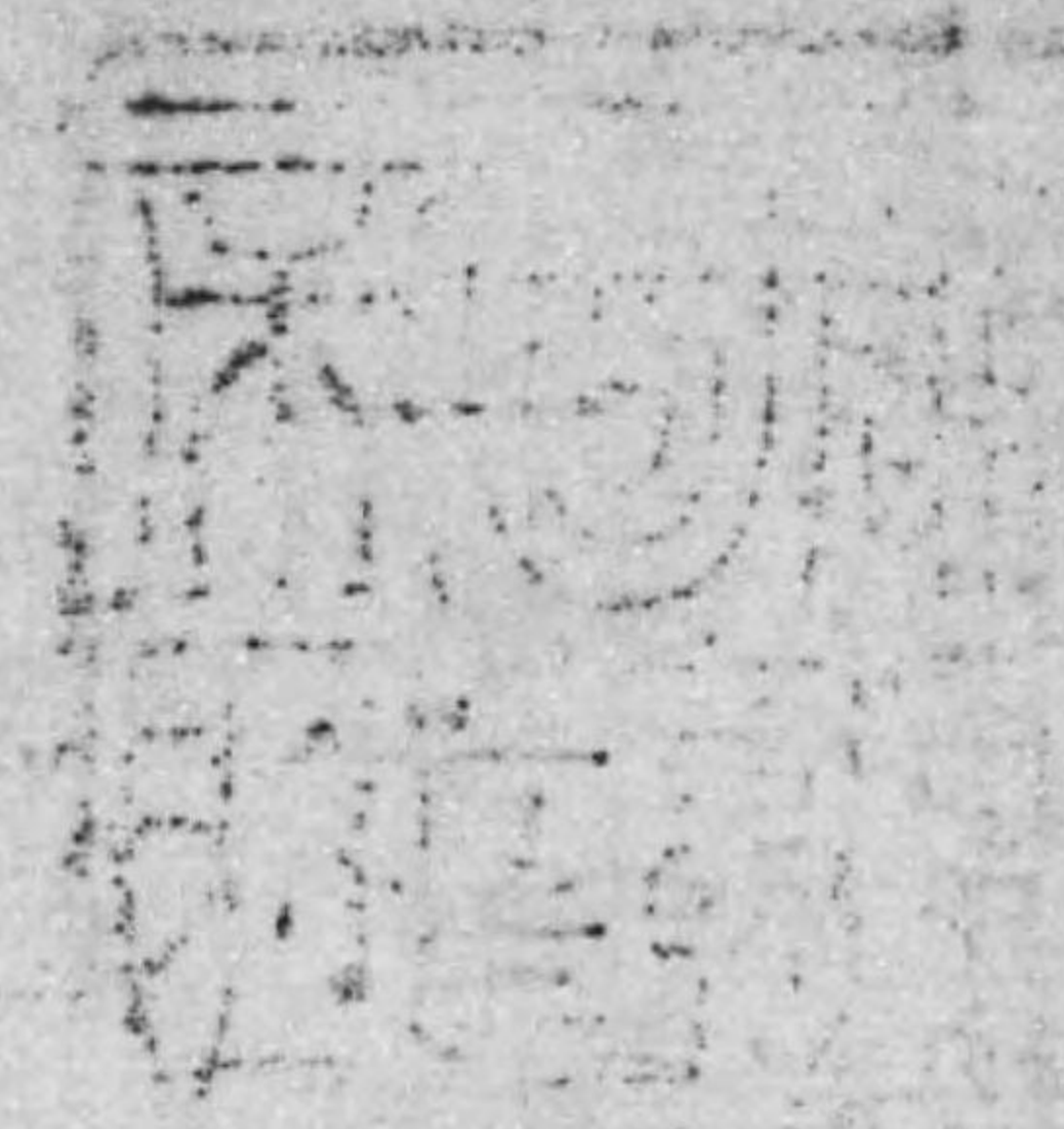


# 事貫行真髓

大成協會主幹 山下信義  
大成協會副主幹 村田太平 合著

京都府伏見桃山 大成協會發行

大正  
10 11.21  
丙交







## 自序

今や『一事貫行』の名は、我國のかなり隅々に迄も擴つてゐる。幾十萬といふ天下の同志が、我が『貫行主義』の行者であり、此『鐵則教』の教徒である。然し幾十萬ではまだ足りない。どうかして幾百萬幾千萬にしたいといふのが、我々の祈願である。我々は生命の有る限り、精力の續く限り、渾身の努力を捧げて、之を同胞に宣傳する積である。嘗て『一事貫行』と題する書物を、此目的の爲に公にしたのであるが、今又こゝに筆硯を新にして、此『一事貫行真髓』の著を公刊することにした。敬愛する諸君よ、どうか愛讀して下さい。愛讀してそして發奮して下さい。發奮して而して、貴下に適する一事を取つて、是非共貫行して下さい。

既に其名の示すが如く、我一事貫行主義には、二つの主眼點がある。『一事』とい



ふ事と、『實行』といふ事とが即ち夫である。吾人は、一定の期間に於ては、必ず一事に精力を集中するを以て、原則となすのである。其志向を二三にし、其精力を四分五裂する者は、何事にも成功することはない。一事とは本氣といふ事である。換言すれば絶大の眞面目といふ事である。凡そ事に當つて本氣を缺き眞面目を缺く者は、仕事それ自身になり切らず、全我の能力を傾注せず、随つて眞理と愛とを其中から擡み出すことが出来ないのである。次に吾人は、實行を以て第二の原則とするのである。中途半端や生嚙りは、吾人の排斥する所である。龍頭蛇尾、始は脱兎の如くにして、終りに處女の如くなるものは、吾人の採らざる所である。我等は完成まで完結まで、根本的・徹底的・徹底的な解決まで、決して當初の意氣を捨てず、志を挫かず、辛苦して倦怠せず、骨を折つて棒を折らず、どこ迄もく、やり通すのである。元より吾人は、人間の永き一生を故意に狭めて、たゞの一事に拘束しようとする

者ではない。一事の眞、一物の精を究めた上では、第二の問題に移り、第三の事業にも進むのである。一善の美果を結び、一悪の根幹を斷つた上では、其次其次、漸次向上して行つて然るべきである。が、例へば學術の研究でも、農工の實驗でも禁酒でも、禁煙でも、早起でも、貯金でも、續けず保たず、貫かず遂げずして、轉々浮動する者を誡めんとするのが、吾人の本旨である。我等は部分の一を以て満足するものではない。一事を貫く意志の力を以て、萬事を貫く成功の原動力たらしめんとするものである。

一事貫行は、其眼目を強意の福音に置くものである。凡そ人間としては、知的の研究も情的の陶冶も肝要ではあるが、それ等の事も、所詮は強き意志、(鐵石の如き意志)の力によらずしては、完全に達成し得られざるものである。あらゆる人生の事業の大成は、すべて強意を以て其根本要素とするのである。



我等は意志教の信者なるが故に、随つて又實行論者である。如何に卑近なことで、も簡単なことでもよいから、兎に角それに取り懸れといふ。斷じて行へと命令するのである。空理空論を事とせず、夢想妄想を業とせず、驀然に真正面に、當の事にぶつ突かつて、汗を流し脂を絞り、皮膚を破り血を流して、さうして眞理をつかみ出し、才能をみがき出し、立派な人格を造り上げよといふのである。だから吾人は、單に此書を読んで下さつたゞけの人々に對しては、何等の喜を感じずるものではない。たゞそれ實踐躬行の勇者、百折不撓の猛士にのみ、深甚の敬意と感謝とを捧げる者である。

大正十年九月十三日、我が皇太子殿下、めでたく歐洲より御歸朝遊ばされて、御奉告の爲、桃山御陵に御參拜の日、

伏見桃山の御陵下なる大成協會にて

山下 信義 記す。  
村田 太平

## 目次

第一章	何物よりも大事な寶は強固な意志。	一
第二章	偉大なる人間力に目をさませ。	二
第三章	現代文明の缺點と一事貫行主義。	三
第四章	日本國民性の短所と一事貫行主義。	三
第五章	強意を造る最良方法。	四
第六章	徹底的解決を得よ。	六〇
第七章	習慣養成の原理。	七二
第八章	一事貫行百例。	七七
第九章	模範貫行者十五例。	九六
第十章	一事貫行の勇者となれ。	一六一



△ △ 大成協會主意 △ △

夫れ人間は、宇宙の靈、萬物の長であつて、意義あり價值ある生活は、此靈長の「我等」にのみ許された、特權であり、義務である。

宇宙渾一の大生命は、分れて物心の二體となり、發して世界の萬象となつてゐる。物質は精神の支持者であり、精神は物質の指導者である。二體の活動相俟つて、靈肉互に調和するに非ざれば、最善至高の生活を顯現する事は出来ないのである。

個人は社會の要素であり、社會は個人の母體である。自我と他我とは一つの我が兩端に過ぎぬ。かるが故に自他圓滿に融合して、至分互に協働するに非ざれば、至福至樂の天國を、此地上に實現する事は不可能である。

我等の行く手は、靈肉調和自他協働の一元的生活である。我等は肉體の強壯と共に、精神の健全を保有しなければならぬ。我等は一身一家の幸福と共に、社會萬人

の慶福を招來しなければならぬ。而して之を貫徹させる信條は、自己に向つて克己を、社會に向つて愛を、擴充させて行くことである。

理想の實現は、努力の結晶に外ならぬ。而して努力の秘訣は、先づ「一」を拓いて之に徹底することである。道は邇きに在り、却つて之を遠きに求むるが故に、茫漠として得る所なきに終るのである。一事の精一業の妙を體顯すれば、萬象の眞萬物の理、自ら之に具備せずといふことはない。大成の理想は、一元調和の生活であり、其發足は、一事貫行の努力である。

一日の活動を永生の欣求に連ね、個人の幸福を社會の繁榮と併せ、經濟と道徳、生活と修養を一致せしめんとするは、實に我等が實踐の主義であり、宣傳の主張である。人よ、須く理想を確認して、日々の努力を之に傾注せよ。友よ、願くば同志相寄り近者相求めて茲に集り來れ。かくて此大成協會に於て、先づ健全分子の中堅團體を形造らしめよ。かくて押し及ぼして、全人類をして、人天最高の理想に到達せしむべく努力せよ。



### 大成協會綱領

- 一、本會々員は、一事貫行の大精神を體得して、體育に、研究に、修養に、業務に、必ず其本領を發揮するに努力すべきこと。
- 一、本會々員は、日常勤儉克己して、家産財團の造成に努力すべきこと。
- 一、本會々員は、慈悲仁愛の善業を行はんが爲に、公益財團の造成に努力すべきこと。
- 一、本會々員は、先づ自己の住する部落

又は市町村を、理想の部落又は市町村となすことに努力し、進んでは漸次其範域を擴大して、國家の大成に貢献すべきこと。

- 一、本會々員は、仰いでは人生の理想に憧憬し、俯しては實踐の歩武を怠らず夙夜に修省努力して、知能の啓發と人格の向上とを期すべきこと。
- 右の五箇條は、本會の趣旨に本づく實踐の綱領であつて、本會々員たるもの、必ず恪守すべき所である。

## 一事貫行眞髓

### 第一章 何物よりも大事な寶は強固な意志。

人間の希望

強くなりたいたい、賢くなりたいたい、偉くなりたいたい、立派な仕事を仕遂げたいと思はぬ人が世に在るか。誰だつて、病人や貧乏人にはなりたくはない。不徳な人間や失敗者となる事は、厭であるに定つてゐる。斯様な事は、別に一人々々に就いて尋ねてみる迄もない事で、百人が百人、千人が千人、皆此通であるに違ひない。小は鍼力製のサーベル下げた餓鬼大將の坊つちやんから、上は腰に梓の弓を張つた白髪の老人

山下信義 共著  
村田太平



まで、皆一様に富強福徳を欲してゐ、立身出世を望んでゐ、徳望家や成功家になりたいと、朝から晩まで祈りぬいてゐるのである。

然しながら、實際世の中の事實はどうか。此希望此目的の成就せられた者が、果して幾人あるか。打見する所、成功者、幸福者、強者、徳者は少なくて、失意の人蹉跎の人は、頗る多い様である。之は一體どうした事であらう。まよにならぬは浮世の常かは知らないが、かくては餘りに情ない人生と言はねばならぬ。運命命乎、努力の足らざる爲か、能力の及ばざる爲か、そも／＼人間の、希望は夢か幻か。天は果して與へざるか。人は到底得る能はざるか。一體諸君どうだらう。

オール、オア、ナツシシ

富も寶である、積みたいと思ふ。知能も寶である、欲しいと思ふ。健康も寶である、保ちたいと思ふ。徳望も寶である、得たいと思ふ。強意も亦寶である、持ちたいと思ふ。然しながら此最後の強意、即ち強い意志は、上に述べた富や

知識や、才能や、健康や、徳望と違ふ所がある。それは何であるかと言ふと、此強い意志、(即ち不屈不撓の、七度轉んでも八度起き上る、鐵の如き意志)は、強能善富等のあらゆる寶の持主であるといふ事である。之があれば、欲する萬事が持ち來され、若し之がなれば、多くの中のたゞ一つをも、得ることが出來ないといふ事である。全體か零か (All or nothing)は、強意の有無で定まるのである。

吾人は思ふて人を愛する事が出來る。欲して財を積むことが出來る。或は學んで知を開き、習ふて才能を高め、願ふて有徳の人となることが出來る。たゞへ生れつきざれば、この長所を持つてゐるにしても、欲せざる人、學ばざる人、習はざる人、願はざる人は、どうする事も出來ないのである。強意の在る所には總ての事が成就する。強意の在る所には天祐がゴロ／＼いてゐる。實に強意こそは、あらゆる物を生み出し造り出す所の親である。



意志とは何か

意志とは行ふ力である。爲す力である。耐える力である。續ける力である。勤勞、努力、斷行、實行、繼續、忍耐、克己、奮闘といふが如き文字にして、強い意志でふ意味の含まれてないものは、一つも無いのである。若し勤勞の中から強意を去れば、勤勞の意味はなくなつてしまふ。若し克己の中から強意を取れば、克己の意味は消失してしまふのである。

意志のない計畫は、たとへそれがどんなによい計畫であつても、結局は空想であり、夢である。實際ではない、事實ではない。大學に入學した夢、博士になつた夢、金儲けの夢、豊作の夢、位の高くなつた夢。人に賞められてゐる夢、夢はいくらでも自由勝手に造り上げる事が出来る。然し夢はどこ迄も夢であつて現實ではない。吾人は夢の千圓千石よりも、事實の百圓百石を尊ぶものである。空想の大臣博士よりも、事實の篤農老商を重んずるものである。夢や空想の大臣博士には、如何なる薄志弱行者でもなれる。たとへそれ現實の大臣博士は、堅志硬行の人でなければ、成る事が出来ないのである。夢想

空想を事とするものは、吾等の友ではない。我黨の士は、沈勇剛毅、堅忍不拔の、意志の人である。

寒暑の所即無寒暑の所

夏は暑いにきまつてゐる。冬は寒いにきまつてゐる。勉強は辛く、勤勞は苦しく、成功には嶮坂があり、立身には難路が在るに定つてゐる。此時に當つて、暑い寒いを言はぬのが強意の人である。辛い苦しいで弱らぬのが強意の人である。嶮坂難路に出遭して、勇氣百倍、意氣益々軒昂たる者が、我黨の士である。

此處に一個の敵が在つて、刀を揮つて吾々に向つて斬り込んで來た時に、吾人は如何にして此火急の所置を執るべきであらうか。弱蟲の或者は、平伏して命乞ひをするかも知れない。哀むべし此人は、南無阿彌陀佛とも唱へぬまゝで、惡悚な敵の手に殺されてしまふであらう。又弱蟲のある者は、三十六計逃ぐるに如かずと考へて、ヒタ走りに逃げ隠れやうとするかも知れぬ。然し吾々は、斯の如き弱蟲であつてはいけない。吾人は



自ら進んで、勇敢に此敵と戦はねばならぬ。而も堅忍自重して、眞の勝利まで健闘しななければならぬのである。

寒暑も我等の敵である。辛苦も我等の敵である。此等の敵は、十重二十重に我等をとりまいてゐるのである。弱蟲や卑怯者は、寒さに怖け暑さに挫け、少難小苦に辟易して逃げたり隠れたりするであらう。然しながら吾人は、夏の鍛冶屋冬の蟄の心持で、寒ければ凍え死をする位の處、暑ければ焼かれて斃れさうな處を目當に、突進しなければならぬ。勇進突撃の大意氣は、五寒の地をも夏と變じ、炎暑の地をも冬にする。精神一度凝り固れば、寒暑の劇しき所之れ即ち無寒暑の所である。而して此處で鍛へ此處で練り上げた人々のみが、眞に成功するのである。本當に大成するのである。

意志は一切を統べる

成業の根本は強意である。意志は扇子の要である。意志は機械の動力である。あらゆる必要の要素が、すべて此意志に繋がつてゐるのである。一千な

りや蔓一筋の心より。』との俳句における、其一筋が意志である。『山下有流水、滾々無二止時、禪心若如是、見性豈其遲。』と、白隱禪師が申された。『如何に身體健かなりとも、心甲斐なければ一切の能無益なり。』と、日蓮大士が教へられた。流水の滾々として止まざるが如く、注意を見性に集中せしむるものは意志である。一切の才能をして益あらしむる、心の甲斐とは意志である。意志は一切を統べる。一切は意志を俟つて、始めて其効用を發揮するのである。

意志の力が最も顯著にあらはるゝは、堅忍持久の場合である。大成の秘鑰は、此大河の如く連峰の如く、洋々蜒々として絶えざる強意に存するのである。小野道風が老年に至り發奮して、遂に日本第一の書家となつたのは、柳に飛びつく蛙の忍耐に感動した爲であつた。可愛い、小學校の坊ちゃん嬢ちゃんやんが歌つてゐるではないか。『枝垂柳に飛びつく蛙、飛んでは落ち、落ちては飛び、落ちては落ちても又飛ぶほごに、さうく柳に飛びついた。風吹く小枝に巢を張る小蜘蛛、張つては切れ、切れては張り、切れても切



れても亦張る程に、とうとう小枝に巢を張つた。」と。さうだ、蛙や蜘蛛にさへも此耐久力がある。然るに萬物の靈長たる人間と生れて、三日坊主たり、兎の糞たり、禁酒もして見た、煙草もやめて見た、朝起もして見た、日誌もつけて見た、百性にもなつて見た、坊主にもなつて見た、色々やつても見、なつても見たが、結局今迄續いたものごては汚名と後悔との外には、何にもないと言ふが如きは、之れ實に蛙にも如かず、蜘蛛にも如かざる者ではないか。

誰しも一度はやつて見るものである。が、たゞやつて見たといふだけでは、其人の眞の價値は定まらないのである。二度やり、三度やり、四度やり、五度やつて、千難を排し萬障を切り抜けた人のみが、勝利の月桂冠を得るのである。最初の突撃には總べての者が勇者であらう。たゞ強敵と戦ふて追ひ返され追ひ返されても、岸打つ波の押し寄せ押し寄せて、遂に敵壘の頂上に日章旗を立てる者のみが、眞の勇者である。「始あらざるなく、能く終ある者稀なり。」最後まで！ 最後の五分間まで耐え忍んで、

勝利を獲た者が即ち眞の偉人である。

カーライルの原稿

英國第十九世紀の文豪に、カーライルといふ人がある。彼が有名なる「佛蘭西革命史」を著さんとして、漸く其上巻の原稿を書き上るや、之を友人の

ミルに示して、其意見を求めたのである。然るにミルの家の女中は、誤つて之を反古と思ひ、何心なく火の中にくべてしまつたのである。之を聞いたカーライルの失望落膽はごんなであつたらうか。彼は之が爲に殆んど失神せんばかりに、驚き且つ悲んだに相違はないのである。若し之がカーライルでなくて他の人であつたならば、恐らく此の思はざる不幸の爲に、當初の志は碎かれたであらうと思ふ。然るに彼は此激甚なる失望の中より、徐ろに其勇氣を恢復し、再び肝血を絞つて、かの浩翰なる著述の草稿を作り直したのであつた。凡そ文人の文を草するや、豆腐屋菓子屋が型によつて其豆腐や菓子を造るが如き、簡單にして容易なものではないのである。或時は沈思黙想して、一行の文



をさへ書く事の出来ない事があり、又或時は書きながら感情が昂奮して、落ちくる涙の止まらぬ様なこともある。文は人なり、文は血なり、文は涙なり。真に心血を絞らずしては、一行の文章も書けるものではないのである。吾人は天地間に比類罕なるカーライルの此詩史を讀む毎に、彼が此不撓の勇氣に對して、滿腔の敬意を拂はずには居られんのである。

我國では本居宣長の古事記傳といひ、瀧澤馬琴の八犬傳といひ、徳川家康が天下を取つた事といひ、禪海和尚が青の洞門を開鑿した事といひ、大なる事業は何れも皆群拔なる強意の賜である。吾人は他の多くの物を失ふてもよい。たゞ一つ此意志を失ふことは出来ぬ。何物よりも大切な實は、各人が其の身の中に備へてゐる、意志である。此意志を強め、此意志を固めて、境遇も移す能はず、感情も動かす能はず、利益も美貌も、誘惑も恐怖も、一寸一分之を左右する事の出来ない様な、磐石不動の大意志を造ることが吾人の成功の唯一道であり、修養の中心核である。強意を養はん、強意を造らん。我が

一事貫行は、此強意を養ひ強意を造る、最善最適最簡の方法であり手段である。成功と幸福と、修養と公益とを熱望する者は、何人も來つて、此一事貫行の門を叩かねばならぬのである。

### 第二章 偉大なる人間力に目をさませ。

仕やうと思へば  
何事でも出来る

人間の力は、非常に強大なものである。仕やうと思へば、如何なる事でも出来るのである。私等は、須く此自己の偉力に目ざめなければならぬ。何が出来ぬ彼が出来ぬと、弱い人間が弱い事を言ふが、之等はすべて、人間の偉大な力を知らぬ爲めに言ふので、大抵の事は、出来んのではなくて爲ぬのである。何事もやればやれるのである。酒が止まぬ、煙草が止まぬ、早起が出来ぬ、貯金が出来ぬ、主人の信用が得られぬ、學校の卒業がむつかしい、日誌がつけられぬ、女狂ひが直らぬ



なご言ふが、皆自分勝手の逃げ口上に止るのである。現に見てごらんさい。酒や煙草をやめた人は、今迄に幾萬人有るかも知れんぢやないか。貧しい世帯から大金を造り出した人も、又は何十年間引きつゞいて早起をしたり日誌をつけたりしてゐる人も、幾百萬人あるかも知れぬぢやないか。彼も人も、我も亦人も。彼の成し得た事が、何故自分には出来ないのか。そんな筈はない。天は夫程迄不公平に人間を造つてはゐない。出来んと言ふのはせぬのである。「爲ざるなり、能はざるに非ざる也。」である。「舜何人ぞ、我何人ぞ。」舜がした程の事は我にも出来なければならぬ。「不能といふ字は愚人の辭書に在り。」とナポレオンが言つた。大決心で取り掛れば、何事でもやれるのである。斷じて行へば、鬼神も避けるのである。然るに何事をも、出来ん／＼で片付けてしまふのは、皆弱蟲の遁辭といふものである。向上の意氣なく斷行の勇氣なく、自分で自分を見くびる意氣地なしが、此世の中で一番下等な人間である。

□

冠鑑日親の  
忍力試験

諸君は、嘗て「冠鑑日親」といふ人の名を聞かれた事があるか。彼日親は日蓮宗の一僧侶である。由來日蓮宗には迫害が多く、宗祖日蓮を始めとして、多くの弟子達が、皆非常な苦勞をしてゐられる。が、其中でも冠鑑日親の苦勞は、特に傑出してゐる様に思はれる。彼は自己が其信仰を四方に宣傳せんとするの前に當り先づ自分で自己の忍耐力を試験してみやうとした。それより彼は一日に一本づゝ其指の爪を剃ぎとつて、其跡へは針を刺し貫したのである。かくて十日に十指の爪を剃ぎ悉して、一本残らず其跡に針を刺し通したのであつた、何と恐ろしい勇氣ではないか。然るに彼は尙之を以て甘んぜず、次には双手を熱湯の中に入れて、湯の冷えて水になるまで其手を出すことをせなかつたのである。是の如くして双手を熱湯に浸すこと一七日、皮は爛れ肉は解くるに至つても、彼は毫も苦痛の色を見せなかつたのである。彼は之を見て自ら大に喜び、是等をしもよく忍ぶべくんば、天下何の忍び難きものか之れ有らんとなし、愈々大折伏の法鼓を鳴らして、妙經弘通の大事業にとりかゝつたのである。



あらゆる追害に泰然自若たる日親

是等の苦勞は、日親にとつては尙朝飯前の事である。彼が最後に牢屋の中に繋がれて、冠鑑日親の名の有る通りに、赤熱した鑑を其頭の上かぶに冠せられる迄の間、幾度ともなく思ふてさへも身の毛がよだつ追害を、受けつゞけてゐるのである。彼が京都一條戻橋の邊に於て、念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊の四個格言を絶叫するや、狂漢痴人と罵られて、瓦石の霰糞土の雨に見舞はれたことは數知れず、遂には時の將軍義教への上書の事が累をなして、牢獄につながるゝ身となつた。然るに此牢獄たるや、獄舎の高さは僅に四尺五寸、廣さ僅々疊四枚敷の所、而して特に日親を苦しめんが爲に、此獄中に投せられたる囚人は最初三十六人、流石の獄吏もそゞろに哀れを催したのであらう、後には三十六人を減じて八人にしたのであつた。四疊敷に三十六人といふこと、是れ既に忍ぶに餘る苦痛ではないか。然るに此四尺五寸の低い天井には、一面に七八寸の大釘を打ちつめて、少しでも腰を延ばせば、すぐ其頭が

突かれる様にしてあつたのである。

斯かる迫害の中にあつても、彼は泰然として、少しも「南無妙法蓮華經」の聲を止めなかつたのである。或は赫々たる夏の日なつに、四方より圓く薪を積み上げた其中に坐らされて、此薪に火をつけられた事もある。或は凜々たる嚴冬の眞夜中に、裸體の上に水を浴せられて、其上に笞で打たれた事もある。かくの如くして或時は焦熱地獄、或時は八寒地獄の責苦にあひ、是の種の拷責幾度なるを知らず、果は陰莖に竹の串を貫かるゝに及んでも、彼は聊かも當初の決心を動かすことなく、寧ろ容色ますます、怡樂を加へて、殆んど人界の苦惱を嘲り笑ふものゝやうであつたといふ。

諸君は之を讀んで、彼日親が何故に斯の如き苦悶に置かれたかと怪しむであらう。然し乍ら訝かる勿れ、古來宗教上政治上の關係より、時には斯の如き慘酷なる追害に遭ふ者、決して稀な例ではないのである。而も吾人は之を讀んで、凡そ人間の意志の力が、如何に強固なものであるか、又一念信仰の力が、如何に外來の勢力に對して、勇敢に戦ふも



のであるかを、知ることが出来るのである。願はくば我が親愛なる讀者よ、壯烈なる此日親の奮闘に照して、各自の平生を省みて下さい。弱い意志、小さい勇氣が、恥かしくて恥かしくてならんぢやないか。人力は實に無限である。此無限の人力を發揮する所に、眞の偉業が出来るのである。

人間と神様  
さは違ふ

如何に人力が無限だからといって、世には人力の到底如何とも成し能はざる部分も有る。之は分りきつた事である。凡そ人間が神様でない、以上、ごの様な事でも自由自在に出来るとは言へぬのである。或人は言ふかも知れぬ。「そんな人間の間力が大きいものならば、天に昇れるか地の底に行けるか。若もそれが出来ぬなら、人力が偉大だ無限だとは言はれまい。」と。然し左様な事を言ふものは、之を屁理窟といふ。常識の備はつてゐる者ならば、左様な愚問を發する事はない。如何に人間の力が偉大であると言つても、早魘が續いた時に雨を降らす事も出来ず、或は降る必要の無い時

にも、雨や雪の降るのを止める譯には行かぬ。子供の無い人が是非に我子を欲しいと思つても、生めぬ者は生めぬ。之も努力が足りぬのだと言つても、それは言ふ方が無理である。百も二百も生きてゐたいと願つた所でそれも叶はぬ。かくの如く、如何に努力を試してみても、人力の及ばぬ所はある。故に昔から、「人事を盡して天命を待つ。」とも言つてある。若しも人力でもつて、宇宙間のありとあらゆる物事が、すべて任意に左右し得らるるならば、最早それは神様であつて、人間ではない。神様ならぬ我々には、出来ない事も澤山に在る。然し乍ら今更人間を神様に比べて、出来ない事があれこれと在るか。らとて、人間をつまらぬ者と見くびるなどは、鳥許の沙汰であらう。人間に獨立自尊が必要であるからと言つて、子供の時から絶対に親の世話になるなど教へる者は一人もない。人力が如何に絶大であるからといつて、何人も神様の上に出よと教へる者はなからう。斯の如きは別段に力を入れて説く迄もないことであるが、兎角世の中には、つまらぬ理窟に捕はれる人もあるから、念の爲に聊か注意を添へておく。



人間には個性の別  
さいふものもある

又人間は生れるからして、個性の相違といふものがある。顔が違ふ、心が違ふ。時には他人の空似といふ様なものもあるが、それとても顔なり姿なり心なりの一部で、完全に相等しい二人の人間などのある者ではない。而して個性の相違は、やがて人に長短の在る所で、記憶力の旺盛な人もあれば、至つて物覚えの悪い人もある。算数の技に長けてゐる人もあれば、至つて之のまづい人もある。大學者でも字の下手な人がある。元帥大將でも、口にかけては落語家講談師には及ばない。無論下手な事でも練習を積めば、或程度迄の成功はせんでもない。しかしさうだからと言つて、僕等が練習をしても、大錦を打ち斃す程の大力士にはなれないし、又大錦が如何に勉強をしたからと言つて、義太夫や浪花節では、呂昇や奈良丸には追つ付けない。古語にも「藝は道によつて賢し。」と在る通りで、甲の長所は乙の短所、丙の短所は丁の長所といふ様なことがある。随つて人間の力が如何に強大であるからと言つても、個性

を無視し天賦を蔑視して、盲目的に突進する事は宜しくない。さういふ事をして右往し左往し、迷ひに迷つて遂に何等の成功をもしないといふ様な人が時々ある。之は活人剣を誤つて殺人剣にし、靈藥の分量をまちがへて毒藥にする様なものである。萬能者多くは一藝なく、足の多い百足虫は随分歩くことが遅い。だから人間の力が如何に大なるものであるとしても、無制限に放散してはならぬ。盲目的に投資をしてはならぬ。之等も多少世路の辛酸を嘗めた人は、よく承知してゐる事であるが、或は無鐵砲な企畫を立てる様な人がないとも限らぬから、一言の警戒を加へて置く次第である。

大なる力は潜勢力  
さして隠れてゐる

然し普通に、人々が、むつかしい、困難だ、出来ん、成らぬ、不可能だ、駄目だといふ中には、此人力の極限外、個性の制限外の事ではなくて、多くの場合爲せば成さるゝ限度内の事を、出来ぬ成らぬといふてゐるのである。酒や煙草がそれである。不平や腹立ちがそれである。朝起や節儉がそれである。孝行や



親切しんせつがそれである。讀書とくしょや日誌にっしがそれである。静座せいざや強健術きやうけんじゆつがそれである。其等それらは何れも出来る事ことである。然しかるにそれを出来できんといふ。さうして之これを辯解べんかいして、天てんだから、命めいだから、運うんだから仕方しかたがないといふ。マア何なんといふ臆病おくびやう、そして又何またなんといふ横着おうちやくであらう辯解べんかいの勇者ゆうしゃは概がいして實行じつかうの弱者じやくしゃである。止よせ止よせそんな辯解べんかいを。そして、たゞ一心いっしんに進すんで見給みたまへ。煙草たばこを止やめたから病氣びやうきにもならず、酒さけをやめたから死しにもせぬ。氷山へうざんの十分じゅうぶんの丸くは常に水中すゐちゆうに在あるといふが、人間にんげんの力ちからも其大部分そのだいぶぶん、平生へいぜいは匿かくれてゐる。非常ひじやうな困難こんなんに出遭であふとか、大切たいせつなる決心けつしんをするとかいふと、匿かくれてゐた此潜勢力このせんせいりきよくが、勃然はつぜんとして顯あらはれて来る。盲者めくらを見よ、指先ゆびさきで字じがよめるぢやないか、聾者つんぱを見よ、口くちの動きうごき方で意味いみを解かいするぢやないか。相撲取すまふとりを見よ、裸體はだかでも風かぜを引ひかんぢやないか。輕業師かるわざしを見よ、一本いっほんの竿さその上うへでも踊おどるぢやないか。かゝる偉力ゐりよくが人ひとにある。たゞ平生へいぜいは潜勢力せんせいりきよくとして匿かくれてゐる。故ゆへに人は、我身わがみにかゝる大力だいきの在ある事ことを知らずしにゐる。が、苦勞くらくに遭あふと此大力このだいきが猛然まうぜんとして發現はつげんし、我われながら鬼神きじんの業わざかと思おもふのである。然しかし鬼神きじんでも何なんでもない。もどく各自かくじの心中しんちゆう體中たいちゆうに隠かくれてゐた力ちからが、表面へうめんに現あらはれたゞけの事ことである。

もどく各自かくじの心中しんちゆう體中たいちゆうに隠かくれてゐた力ちからが、表面へうめんに現あらはれたゞけの事ことである。

□

こゝぞと思ふ艱  
難にアツ、カレ

然しからば此偉大このみだいにして靈妙れいめうなる吾人ごじんの潜勢力せんせいりきよくを、如何いかにして發現はつげんせしむべし。きかといふに、之これが爲ためには各々おの／＼自分じぶんにとつて、苦くるしい仕事しごとに突進さつしんするが一番いちばんよい。苦勞くらくが自分じぶんを磨みがいてくれ、辛苦しんくが自分じぶんを鍛きたへて呉くれるのである。而しかして其辛そのしん酸困苦さんこんくの度どが大だいなれば大だいなるだけ、琢磨たくまの功鍛練こうたんれんの蹟せきも大だいである。五十ごじうの苦勞くらくをした者ものには、十じうの苦勞くらくは苦勞くらくにならず、百ひやくの苦勞くらくをした者ものには、五十ごじうの苦勞くらくは平氣へいきである。昔むかしならば大名だいみやうの息子むすこ、現今げんこんならば華族くわぞくの若様わかさまと言いふ様な者ものには、弱味よわみ噲せや低能兒ていのちじに近い者ものが多い。富家ふかの子弟しだいにも此種このしゆの者ものが少すくくない。之これはどういふ譯わけかといふと、少すくしも苦勞くらくといふものを知らんからである。無限むげんに強大きやうだいなる人間にんげんの力ちから、神しんに入るいるまでに進すすみ得うるる我われ々の力ちからは、困難こんなんにブツカツて初はじめて現あらはれて来るのである。古今ここん東西とうせいの英雄えいゆう豪傑ごうけつは、大抵たいてい貧苦ひんくの膝ひざで育そだて上げられた者ものである。獅子ししは子こを生うんで三日目みつかめには、之これを谷底たにぞこに落おすと



いふが、此谷底に突き落された獅子の児が、辛苦艱難をしてもこの所へ上つて来る時に、  
 將來百獸の王となる、偉大の力が磨き出されて来るのである。艱難辛苦を鬼や蛇の様に  
 恐がつて、あちらこちらと逃げ廻つてゐる人間には、偉大な潜勢力が自覺されず、又  
 發現する折がないのである。かくして出来上つた人物は、海月の出来損ひの様な、骨の  
 ないグニヤグニヤの、薄志弱行者である。我等は斯る人物を憐む、我等は斯る人物を卑し  
 む、我等はかゝる人物を好まない。吾人は堅志硬行の人でありたい。吾人は石心鐵腸の  
 人でありたい。吾人は、「うきことこの尙此上に積れかし、限りある身の力ためさん。」とい  
 ふ歌の様な、意氣ある人間になりたい。悪戦苦闘の幾歳を満身創痍に送つても、尙自若と  
 して、七顛八起の計畫に熱中する位の人物でありたい。前にのべた冠鑑日親の様な、水も  
 火も、之を如何とも成し能はざる程の、勇士でありたい。而してかくなる爲には、どう  
 しても、苦勞に向つて突進しなければならぬ。朝仕事は厭、夜學は厭、粗食は厭、薄着  
 は厭、雇はれるのは厭、使はれるのは厭、禁煙は厭、禁酒は厭、暑い日は厭、寒い日は  
 厭と、厭々づくめで暮してゐては、鐵腕鐵意は造れない。偉大な潜勢力は現はれては來  
 ない。随つて大人物にはなれず、大事業は完成出来ない。ズット四方を見廻して、こゝ  
 ぞと思ふ困難に、奮起突撃しなければ駄目である。

### 第三章 現代文明の缺點と一事實行主義

開けたさほど  
ういふ事か

學者も凡人も、世の中が開けたく、と口癖の様に言ふが、開ける、といふの  
 は、一體どの様な事を指して言ふのか。開けたといふのは、千里一瞬の汽  
 車が出来、四萬噸五萬噸の大汽船が出来、議會が出来、富豪が出来、無線電信・自動車  
 飛行器などが出来たことだけをいふのか。或は又日本刀がサーベルになり、編笠が帽子  
 になり、西洋料理屋やカフェーやバーが殖えることを言ふのか。けれどとも考へても見給  
 へ。汽車や汽船で四通八達の便利だけはあるが、其汽車や汽船に乗る人間の様子はどう  
 であるか。一等二等は下品な成金共や、藝者とも淫賣とも判断のつかぬ様な、穢らはしい



連中で、賑つてゐるではないか。又三等では若い男が老人子供を突き飛ばして、自分の座席を争つてゐるではないか。それでも矢張り汽車や汽船さへあれば、世の中は開けたと言へるのか。或は又帝國議會なるものはあるけれ共、之とても一名動物園てふ渾名さへある位で、代議士は大偽師、衆議院は醜議院と見做して居る者も少くはなく、恐れ多きも宮城及び御所の所在地である、東京市及び京都市を始めとして、其他多くの都會では、市會議員の收賄行為が暴露して、市會議員ではなくて私懷議員だらうなぞ、言はれてもゐるが、それでも矢張り國會議事堂や市會議事堂に儼然と建つて居れば、文明開化と稱しても差支はないのであるか。或は又國富が増したの富豪が殖えたのといふ事は聞け共、さりとて貧民窮民の數が、それに比例して減つたとも思はず、働いても、食へぬ人間が、以前よりも尙より多く居るらしいが、それでも文化は駭々として、進んだと言へるのであらうか。

他人は何と言ふかも知らぬが、私等は「否」と答へる。皮相の文明はあつても、内實の文明はない。虚偽の文化、不完全の文化とは言つても、眞實完全の文化であるとは言ふことが出来るのである。

所謂文明の弊害を見よ

經濟學は價格經濟學であつて、厚生經濟學ではなく、教育は主知教育であつて、人間教育ではなく、文明は多忙と繁雜と喧囂とに充ちて、眞に各人の健全幸福なる生活を進めやうとはせぬのである。之が現代である。之が現代の文明である。汽車や電車の出来たお蔭で、成程便利になつたことは言ふ迄もないが、之が爲に人間の脚力及び一般體力は、著しく弱くなり、神經衰弱や氣狂の人が、大に殖えて來たのである。過般も自分は汽車の中で、飛驒の國高山在のお婆さんと話をしたが、六十ばかりのお婆さんが三人、自分の家から岐阜に出るまでの三十里を、一日に十里づつ、三日間歩き續けて、元氣は平生と少しも異なる所なく、之から京都の本願寺へお参りをするのだと言つて、喜んでゐた。然るに此日自分は京都の成家へ立寄ると、丁度今日は、こちらも



二三人つれ立つて、高雄へ紅葉見に行つて来たといふのであつたが、何れも三十前後の元氣盛りの人々であるに拘らず、往復數里の觀楓に疲れきつて、まるで病人同様の重態である。親しい人がわざ／＼立ち寄つて下さつても、愆も得も禮儀もない、今夜ばかりは起きられぬといふ有様。之を見て余は晝の老人と思ひ合せ、つく／＼と文明が人を弱くすることの甚だしきを、痛感せずには居られなかつたのであつた。醫術が進歩して病人が多くなり、國富が増加して貧民が殖え、夏は避暑冬は避寒、ソレ厚いシャツだ、ソレ煽風器だと、人間の抵抗力は眼に見えて減つて来る。タカチヤターゼを飲むが故に胃が弱り、柔い物ばかりを食ふが爲に齒が弱り、讀書するから近眼になり、心配するから神経病になり、かくて弱い人間が更に弱い子を生み、其弱く生れた子供を社會が更に弱くして、此調子で行けば、人類は滅亡する外に、其行く道がないのである。

□

文明人は必ず滅ぶ  
さきまつてゐる。

古來文明は、餘り長くは續かぬものと定つてゐる。西洋史で有名なギリシヤ文明も、早く紀元前八百年頃から發達はしたが、其盛時は數百年に止つて、紀元前三百年頃には、アテネ市も、スパルタ市も、テーベ市も、北方蠻賊の爲に亡ぼされてしまつた。ユダヤの文明はダビデ・ソロモンの盛時より、エルサレムの没落まで、多少の間斷を以て約一千年間繼いでゐる。ローマの文明も、初期の王政時代より其滅亡までは、約一千年と見做されて居る。其他エヂプトの文明も、支那の文明も、印度の文明も、皆一千年内外にして亡んでゐる。故に或人は言ふ、「文明は一種の病ではないか。」と。然り文明は恐らく肺病の様なものであらう。之に罹つた國民は、早晚必ず奢侈文弱、優柔華美の病症を呈して、過去の歴史といふ墓場の蔭に葬られてしまふのである。かう思ふと文明は恐ろしいもの、悲しむべきものである。ケイ・ロビンソンといふ人が言つてゐる、「將來の人間は、齒なく、足趾なく、軟弱なる筋肉と殆んど運動に堪へざる四肢とを持てる、禿頭の動物になり終るであらう。」と。さうだ、牛乳やスー



プや、其他の柔かい物ばかりを食ふ人間は、遂には齒の無い動物になるであらう。常に帽子を冠り靴を脱がざる人間は、終には禿頭にして足趾のない動物になるであらう。一度奢侈の習慣をつけた者は、なかく元の貧乏生活には歸れないものである。それと同じで一度文明の弊風に染んだ者は、容易く元の質實剛健に後戻りすることは出来ないのである。危いと知つては直ぐに元の貧困生活に歸り、行き過ぎた、片寄つたと悟つては、忽ち過去の勤儉尚武に後戻りをするここの出来る國民は亡びない。が然し、それは言ふべくして行はれざる事柄に近い。さればこそ過去の文明國が皆一齊に亡んだのである。歴史は最も雄辯に、此文明の弊害を物語つてゐるのである。

□

亡びざる文明とは如何なるものか、

然らば過去の文明國はなせ斯の如くに、一つ残らず亡んだのであるか答へて曰く、それは其文明なるものが、眞の理想的文明ではなくて、畸形的文明であつたが爲である。本當の文明といふものは、其物質的方面と精神的方面

換言すれば體・智・情・意の四つが、完全圓滿に調和して發達する事が必要である。之を個人並に家庭にあてはめて考察すれば、強能善富の四要素となるのである。此四つは眞の文明の四本柱、健全幸福なる人生の四元素である。之が具備すれば國家は永遠に存續發展し、之が具足すれば、家も村も亦個人も、榮える計りで衰へはせぬのである。衰へるといふのは、此四元素に何か足らん所があるからである。何處かに缺點があるからである。國家でも個人でも同じことであるが、唯一つの缺點が、他の多くの長所を零にするものである。千丈の堤も蟻の穴より崩れるといふが、此道理は國家並に個人にとつても同様である。恐るべきは此缺點である。此偏頗畸形的發達である。吾人は須く現代の世界を見、現代の日本を見て、精細に其文明の性質を檢査する事が必要である。

□

今の文明は知力の文明

現代は金と智恵との世の中である。更言すれば物質と智力との世の中である。前にあげた體智情意の其中の、知識のみの重んぜらるゝ文明である。



知識は外界の自然を征服して、之を吾人の日常生活にまで提供した。汽車といひ汽船といひ、自動車といひ飛行機といひ、電信といひ電燈といひ、宏壯の邸宅といひ美麗の服装といひ、孰れも皆人間智力の發達が齎した、科學的文明の賜物に非ざるものはないのである。今より約四百二十年の昔、西洋では東ローマ帝國の滅亡後ほとんど百年に亘つて、伊太利を中心として、人間の一大自覺運動が興つた。史家は之を『文藝復興』といつてゐる。此『文藝復興』以來、人智は急速に進歩して、科學の發達は驚くべき便利と奢侈とを人間に與へたのである。行く世界は廣まり、見る世界は高まり、都會は不夜城となり山間は避暑地となり、着る物は軽くて美しく、食ふものは柔くて甘く、實に極樂も天國とも譬へ様のない開けた世界を、此地球の上に造り出したのである。

然し乍ら、之は竟畢知力の文明である。物質の文明である。随つて肉の満足は得られず、靈の満足は得られない。繁華は人間を横着にし、便利は人間を弱くし、享樂は人心を悲しくし、奢侈は人性を軟化した。かくて一度暗黒なる宗教の束縛をはなれて、知

識の自由を得た人間は、やがて又知識の爲に囚となり、科學のお蔭で進化した社會が、今は又科學の爲に滅亡の淵に押し流されんとしてゐるのである。今日の文化は聰明の文化ではある。然し身體を強くし、感情を美しくし、意志を鐵石の如く鍛へる所の文化ではない。言ひかへれば人間を賢くする文化ではあるが、同時に人間を不幸に落す文化である。



主知主義の教育を改良せよ

現代の此文明此風潮に迎合するものが、即ち今の主知主義の教育である。教へる主義、知らせる主義、機械的詰込主義の教育である。普通に教育は進歩したと人が言ふが、それは單に量の進歩であつて、質の進歩ではない。多くの人に教育の行き渡ることは行き渡つたが、其内容はヘルバルト（十九世紀の有名なる獨逸の教育學者）式の、苦心させずに面白がらせて、知識ばかりを教へ込む主義の教育である。故に今日の人間は、知ることにかけては進んだもので、百科全書に匹敵する程の多量の



知識が、頭の中にギツシリとつまつてゐるのである。然しながら身體の強健は、知識の多きに伴はず、情意の陶冶に至つては、知識の大きさと全然反比例に進むらしき傾向さへある。故に見てごらんさい、山奥の人々は親切で正直で、身體も亦強壯であるが、都會地の人間、教育ある人間は、不親切で不正直で、そして身體の弱い者が多いのである。今の世に最も必要な教育は、主知主義の教育ではなくて、主意主義の教育である。教へる主義知らせる主義の教育ではなくて、やらせる主義の教育である。孝行でも敬神でも博愛でも體育でも、單に其必要を知つてゐるといふだけでは、何の價値もないのであつて、眞の價値は、其知つてゐることを行ふてゐるか、はた行つて居らぬかによつて分れるのである。昔支那の王陽明先生は、「知つて行はざるは是れ未だ知らざる也。」と喝破し、「行ふて初めて知る」と教へて、實地の經驗事上の練磨を強く唱道せられたのであつた。やる主義に限る、やる主義に限る。書物を一つの本箱から他の本箱に入れかへる様な、詰めかへ主義の今の教育は何にもならぬ。偉人日蓮は「身を以て經を讀む。」と申さ

れたが、身を以て經を讀み、身を以て書物の内容を味ふのでなければ、眞に知つたとは言へぬのである。現代文明の弊害を救ふものは、實に主意主義の教育である。小學校の生徒にも、少く教へて多やらせる。中學校、高等女學校の生徒も同様、青年團、處女會等の修養も亦同様である。何よりも彼よりも、先づ以て其意志を鍛錬し、更に其鍛錬された意志を通じて、體を養ひ情を養ひ、知を磨かなければならぬ。強き意志！強き意志！強き意志！それが現代の誤れる文明を立て直す、根本の力である。強き意志！強き意志！強き意志！意志を養ふ所の一事貫行主義が、現代文明の頽廢を治療する、六〇六號の注射液である。

#### 第四章 日本國民性の短所と一事貫行主義

日本國民性の長短

前章に於ては、東洋西洋を通じての、現代文明の特徴及び傾向よりして、意志鍛錬の必要を力説したのであつた。本章に於ては更に活眼を轉じて、



同じ觀點に立ちながら、我等日本國民自身の特性に就いて、其長短を反省したいと思ふのである。吾人日本國民は、其各個人に就いて見れば、相同じからざるそれらの性質があるけれ共、之を打つて一丸とし、國民全體として見た時に、果して吾等は如何なる長所を持ち、又如何なる短所を備へてゐるであらうか。之が本章に於て、諸君と共に研究せんとする主題である。

日本人は武勇に富む。日本人は戦争に強い。日本人は祖先を大切にし、又禮儀を重んずる。日本人は、機敏で、潔白で、優美で、織巧である。神社に表れ、櫻に現れ、古事記に現れ、萬葉集に現れ、或は日本武尊、菅原道真、織田信長、乃木大將等に體現されてゐる長所は、すべて我國民性の長所である。斯の如き長所に於ては、何處の國民にだつて負けるものではない。諸君試に、芳賀文學博士の「國民性十論」といふ書物でも一讀して見給へ。一層詳細に、是等の長所が了解されて愉快である。

實際日本國民は、長所の多い國民である。よく理解し、よく感激し、よく模倣し、よ

く實行する國民である。然し又かゝる美點、かゝる長所の反面には、尠からざる缺點もないではない。狂熱的排外的で、自負心の強い負け嫌で、小規模で輕卒で、飽き性で氣短かで、上スベリで近眼で、親の脛を噛ることを恥とせず、早くより樂隱居することを手柄と考へ、親族の保護官權の庇護によく依頼し、功名心の強い割合に獨立心が弱い。かくの如き缺點を有する者が、吾人の同胞である。數へて見ると、長所も多い代りに短所も多い。而してそれら多くの短所の中でも、特に顯著なものとして吾人の猛省を要するものがある。それは何かと言ふと、持續力の缺乏、粘着力の不足、何をしても花火的一時的で、牛の涎の様に長く續かぬといふ事である。日本人は此點に於て、酒に類して餅に類せず、馬に似て牛に似ず、折れ易き木に同じくして、粘り強き竹と、其性質を同じくせざる者である。こゝに日本國民性の、一大缺陷が在るのである。

□



日本人の  
戦争振り

例を擧ぐれば數限りもないが、先づ今日迄百戰百勝の名譽を保つた戦争に就いて、考察してみやう。戦争に於ける日本人の長所は、勇進敢戦にある。命を鴻毛の輕きに比し、死を見ることが歸するが如く、何事でも逡巡することが嫌ひだから、イザとなればすぐ突貫で、一氣呵成に敵砦を乗り越え敵壘に押し寄せて、「一が他か」で勝負を決してしまふのである。だから日本では、常に急進論は受がよくて、漸進論は評が悪い。兎に角非常に氣が短くて根氣が無い。脊丈が短いと氣迄短くなるものと見える。實に短兵急である。「一舉直ちに敵壘を抜くか、然らずんば死か。」といふのが日本人の戦争の仕方、此氣性は日本人が愛誦する、櫻の歌にもよく現れてゐる。

敷島の 大和心を人とはす

朝日に匂ふ山櫻花

何といふ美觀、何といふ潔白であらう。然し餘りに潔白すぎ、餘りに急ぎ過ぎる缺點も、よく此歌に表はれてゐる。今日一寸を進み、明日一尺を取り、寸又寸、尺又尺、

遅くとも堅實に、チリ、と詰め寄る的の攻め方は、今の日本人には出来ない戦争の仕方である。

所で戦争も、總べて日清戦争や日露戦役のやうに、一年二年で片付くものならば好都合であるが、今後の戦争は、敵も味方も多くの國が聯合して、規模が大きければ大きいだけ長くかゝり、とても一年二年ではすむまいと思はれる。さすれば今後の戦争は、力競べよりも根競べといふことになる。昔ては日本にも前九年の役、後三年の役といふ様な長い戦争もあつたが、西洋歴史にはそれより長い、三十年戦争といふものが書いてある。戦に臨んでは勇敢決死も、もとより無くてはならぬのであるが、それと共に長養持續、自重忍耐、根氣よく辛抱強く堪え忍ぶ勇氣がなければ、最後の勝利は得られぬのである。戦争は單に一例に過ぎぬ。研究に於て、發明に於て、事業に於て、教育に於て、總べて堅忍不拔の意志の力が、緊要缺くべからざる寶である。



信長と秀吉と家康

日本人の多くは、信長式であつて家康流ではない。誰も知つてゐる俳句ではあるが、嘗て或人が信長、秀吉、家康の三英雄を代表して、杜鵑の句を詠んだ事がある。「鳴かぬなら殺してしまへばどゞぎす。」之が信長の句である。一徹短慮の性質が、目に見る様に示されてゐる。「なかぬなら鳴かしてみせう杜鵑。」之が秀吉の句である。流石に數ある日本英雄中での選手だけあつて、負けぬ氣の強い、心持のよい發句である。「鳴かぬならなく迄待たう杜鵑。」之が家康の句である。隱忍自重、靜に力を練り機を待つて、どうく天下を自分のものにしてしまつた、家康らしい發句である。又嘗て或所に一枚の戲畫があつた。四人の武士が、鎧甲で餅搗きをしてゐる。杵をあげて臼の中の餅を搗いてゐる者は信長である。信長のつく餅をはき入れたり運んだりしてゐる者は、光秀である。光秀の運んで來た餅を手で千切り、圓くならしてゐる者は秀吉である。而して最後に一段高い所に座つて、甘さうに此餅を食つてゐる者がある。之が即ち家康である。家康は幸福者である。然し家康の幸福は偶然に來たのではない。彼が

永い間の忍耐自重の賜である。此お爺さん別の所で人を誡めて「人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。」と言つてゐる。誠に名言と謂つべきである。多くの日本人は、信長及び秀吉を好いて、家康を嫌ふ。尤も私も、あまり家康を好みはせぬのである。彼には何處となく腹黒い所がある。狸爺など、評される要素が、慥に彼の中にある。此點で人が皆家康を嫌ふのは無理もない。信長は敏捷且正直、秀吉は豪邁且潤達、然るに家康は隱險且執拗、幾ら辯護しても、此點は辯護しえられぬ。然し一度眼を移して、其辛抱強い點、其根氣よい點を見れば、家康は實に日本國民の模範とするに足りる。「鳴かぬならばなく迄待ちませう。」と言ふ所は、矢張り大將軍たるの器量である。吾人の宜しく探つて以て學ぶべき所である。「よきをとり悪しきを捨て、外つ國に、劣らぬ國となすよしもがな。」探長補短は國民性訓練の最大要諦、而し又國運發展の最大の要件である。



利根より  
も鈍根

すべての眞の成功は最後に来る。最後の五分間に来る。此最後の五分間迄堪え忍ぶ人でなければ、大成はせぬ。此人には小成は求め得べきも、大成を望むことは出来ないのである。日本人は器用であり機敏である。小智恵がまはり小ざかしい所がある。然し大忍がなく大量がない。涓々たる細流の趣はあるが、洋洋太河の如き所がない。之では大國民たるの任務は果せぬ。モット鈍重、モット大量、モット長持のする、始めに負けても終に勝つもの、七度轉んでも八度起きるもの、持久の國民、意志の國民になつてもらいたいものである。

鈍物と言へば、日本では直ぐ之を輕蔑するが、實は鈍物の方が良いのである。名僧澤庵和尚も次の様に言つてゐる。「利根(利發)の人は妙旨妙し、鈍根(魯鈍)の人に妙旨あり利根の人は疾く走り行き過ぐるを、鈍根の人は漸々に其理を盡す。利根の人はよく前言を記す。之を説くと雖妙解妙し。鈍根の人は多言にわたらずして、一句一言の上にて、久しく之を止めて思惟する故に、利根の人よりは却つて妙解を得るものなり。山に

入り果實を拾ひ茸をとるに、茸多きを心にかけて走る人は、却つて之を得ず、走り過ぎたる跡を認めて、却つて多きを得るものなり。多きを思ふ者は多からず、妙きを捨てざるものは多きに至ること、萬事にわたるによりてなり。」と。全く其通りである。鈍物がよい。鈍物になつてもらいたい。百折不撓の鈍物、千辛萬苦をものともせぬ鈍物、さういふ鈍物になつてもらいたいものである。



大日本帝  
國の理想

輝く理想が日本に在る。正義を四海に宣布するといふ大理想がある。此大理想を完成するのが、我等日本國民の使命である。横井小楠先生が謳つてゐる。「何ぞ雷に國を富まさんや、何ぞ雷に兵を強くせんや、正義を四海に布かんのみ。」之が我國民の顯揚すべき理想であり、又日本國民が、永久に存續發展すべき所以の理である。

日本は亡びざる國である。亡ぶべからざる國である。前者は開國の當初、皇祖の神勅



によつて堂々と宣言せられ、後者は國民の信念として、六千萬人の體の中を、脈々とし  
て巡つてゐる。

豊葦原ノ瑞穂ノ國ハ、是レ我カ子孫王タルヘキノ地ナリ。汝皇孫行イテ治メヨ。寶  
祚ノ隆マサンコト、天壤ト與ニ窮リ無カルヘシ。

遠大の理想は、吾が國土に植え付けられてゐる。久遠の使命は、我等の双肩に懸つて  
ゐる。世界には國も多く人も多い。しかし理想の無い國使命の無い國民は、何れも皆一  
時一時の役目を演じて亡びてしまつた。立てよ國民、勵めよや同胞、お互に此大理想を  
守り此大使命を果すが爲に、奮進猛進しようではないか。

翻つて思ふに、國の歴史の興亡といふものは、内部に於ける國民性盛衰の表現である  
其起るも國民性、其仆るも亦國民性の致す所である。國民性の長所が其短所を蔽ふ時  
は、これ即ち國運昇天の時である。國民性の長所に包まれたる短所が、漸く其猿尾を表  
はし來るの時は、これ即ち衰亡の兆あるの時である。短所益々昂じて長所を蔽ふに至つ

ては、國家は滅亡の外に道なきの時である。實に我等が有する國民性を訓練することは  
國運發展理想顯現の爲の、第一の要素である。

短氣飽き性は、日本人の缺點である。耐久力、持続力の乏しきは、國民性の短所である。  
此短きを補ひ此足らざるを足して、火も焼くべからず、水も浸すべからざる、金鐵の大  
意志を造ることは、正に國民教育上、國民修養上の要務である。大理想を遂げんが爲に  
は大意力を要する。意志が大事、意志が大事、意志強きものは大智に優り、意志弱き者  
は低能にも劣る。意志だ、意志だ。之が日本國民の、正に全力を集中すべき所である。

精神の  
三作用

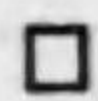
意志、意志と言ふが、一體意志は何處に在るのか。石ならば山にもあり、  
河原にも在るが、其石にもまざる強い意志といふものは、そも／＼何處に  
あるのか。

意志は心の中にある。人間精神の中に存在する。人間の精神は、普通之を知情意の三つ



に分ける。知は知る作用、情は感ずる作用、意は欲する作用である。三つの者が渾然として融合しつゝ、微妙な心の働を形成してゐるのである。而して其中でも知識は事物を受納し、感情は事物の與へる快不快を感ずるので、其作用は共に受働的であるが、意志は之に反し、事物に向つて能動的に進むのである。意志は外に現れては行爲となり、反復せられては品性となり、内に向つては注意となる。知情意の三作用は、何れも人間にとり必要なものであつて、知磨くべく、情養ふべく、意練るべしと雖、凡そ品性の修養事業の成功に於て、強大なる意志に勝る必要物はないのである。何となれば、欲する作用、爲す作用、持續する作用、やり通す作用は、是れすべて意志の作用に外ならぬからである。若し之を一個の植物に譬ふれば、意志は根幹であり、知識は枝葉であり、感情は花である。三者等しく必要であるには相違ないが、其中でも取り分けて大切なものは、根幹たる意志である。強意は實に成業の根本的要素であり、修養の中心的因素である。人強意なくして事業に志すは、足を切つて旅行に出る様なものである。どうして目的地に達することが出来るやうか。

目的地に達することが出来るやうか。



良き意志  
を養へ

然らば良き意志とは如何なる意志であるか。曰く「集中適確にして、持續力の強大なるもの、而も其集中し持續する所の目的物が、常に善きもの、價值あるもの、有益なるもの」を指して言ふのである。集注力と持續力とは、意志の分量である。善きもの價值あるものに向ふは、意志の性質である。此性質と分量とが兼ね備つて、(1)良き事柄に、(2)一心不亂になり、(3)而も決して中途に斃れない所の、良き意志なるものが出来るのである。

世の中には注意の纏らぬ人、或は何事にも、一生懸命になり、三昧に入る事の出来ぬ人がある。之は意志の集中力が弱いのである。又世には、何事にも飽きつぼくて、少しも永續のせぬ人がある。之は意志の持續力が足りないのである。石の上にも三年、壁に向つても九年の辛抱をするのでなければ、大事を成し遂げる事は出来ないのである。更に又



世の中には、兎角他人の邪魔になり、社會の害毒になる様なことを、耻ぢす恐れずに熱心にやる人もある。之は意志の性質が悪いのである。集中力が弱くてもいけない。持続力が足りなくてもいけない。性質がわるくてもいけない。三者揃つて、始めて好き意志となるのである。が此中でも、特に日本人に缺けてゐるものは、第二の持続力である。意志が意志たる本領をなす中心的部分である。集注力はかなりにある。性質又必ずしも悪くはない。たゞ持続力の一點に至つては、極端に弱い。之では國運の徹底的發展を期し理想の萬全的完成を見ることは、不可能である。是れ私が本書に於て、特に國民性の訓練を高潮すると共に、全國民に向つて、強き意志、確き意志を造る所の最良の方法たる、一事實行への入門を、熱血熱涙をしぼつて、勸奨する理由である。

### 第五章 強意を造る最良方法

欲するもの之を君に與ふ。

□ 強い意志が其れ程大切なものであるならば、其強い意志を得るには、どうしたならばよいのか、其方法を指示してもらいたいと、要求する人が多からうと思ふ。峨々たる巖石をも打ち通す不斷の溪流の如き強意、斃されても倒されても起き上り起き上る不倒翁の如き強意、彼の冠鑑日親の如き、若しくは將軍家康の如き強靱なる意志は、如何にして造り得らるゝのか、是非教へて貰ひたいと、言ふ人が多からうと思ふ。

其人等に教へる。玉を得んとする者は深山に入らなければならぬ。虎兒を獲んとする者は虎穴に入らなければならぬ。而して強い意志を造らんと欲する者は、一事實行に入ること必要とするのである。我が一事實行は鐵則教である。無例外宗である。一度斷乎たる決心をして、自己改造の一事業にとり掛れば、貫行して以て慣行となる迄、決して中止したり全廢したりすることを許さぬのである。欲するもの之を君に與ふ、たゞ其



代價を拂ひ給へ。強意は無報償では得られない、之に相當する代價を拂ふことが必要である。而して一事貫行の苦勞こそは、此強意（あらゆるものに優る實）を求むる爲の代價である。貴下が一事貫行に熱中する其眞面目の大きさに比例して、吾人は、——否、神は、——如何なる強意をも君に與へるであらう。

□

使へば太る  
使はれば瘠る

手を使へば手が太くなる。足を使へば足が太くなる。體を使へば體が強くなり、意志を使へば意志が強くなる。之は自然の法則である。使はず用ひず働かずしては、何物をも強くし太くすることは出来ないのである。農夫の腕を見よ、車夫の脚を見よ、拳闘家を見よ、柔道家を見よ、力士を見よ、使はずして此の腕此の脚が有るか。働かさずして此脊此腹があるか。犬は脚が強いから走るのではない。走つたからして脚が強くなつたのである。獅子は齒が丈夫なからして、骨を食ふのではない。骨ぐるみ食つたが故に、齒が強くなつたのである。使へば進歩し、使はねば退歩する。

之は精神でも身體でも同じことである。尤も之を使ふにも程度があつて、使ひすぎれば又害がある。「過ぎたるは尙及ばざるが如し。」といふ格言もあるから、適度を知り程度を守ることが肝要であるが、或程度迄は、どうしても使はねば發達せず、用ひなければ進歩せぬ。總べての事が此通りである。随つて我等の意志も、此原則に外れる事はないのである。使ふべし、用ふべし。意志を強くせんと欲する者は、須らく其意志を使用しなければならぬ。

□

世の中は意志鍛練の道場である

青年期は修養の時代である。此大切なる時代に於て其修養を怠るは、之れ即ち終生不幸の種子を播くものである。青年は修養に熱中しなければならぬ。而して青年が成すべき修養の道多しと雖、精力集中、堅忍徹底、奮闘克己の習慣を養ふにも増して、大切な事はないのである。

軟弱なる性情は、時に優美であり愛嬌に富むこともないではない。乍然かくの如き性



情は、到底方針を力守し主義を維持するに適せず、困難と見れば忽ち逡巡し、一度躓けば再び起つ勇氣更になく、恰も舵なき舟が漂々として、風のまにまに何處ともなく吹きつけられる様なものである。此種の人も快調順風に帆を上げてゐる間は、あまり堅志硬行の人と變りはなからうが、一度疾風怒雨の猛然として來るに遭へば、忽ち舵を失ひ舟を覆して、底の藻屑となり果て、しまふのである。

社會は一大學校である。人生の周圍は、何人も其意力を養成し、鍛錬する事柄でみちくしてゐるのである。世路の難關、人生の競争、孰れか人をして強固の意志を造らしむるの因たらざるものありや。然るに不幸にして、此社會に觸れず此世間に入らずして、溺愛の教育を受けて、常に防波堤の内に於てのみ舟を操り、室咲の花、手の中の玉の如くに珍重されたるものは、大切な修養時期を「幸福の檻」の中に過して、他日の後悔を此間に播種するのである。「一人息子と寒菊は、かわいがられて菰かぶる。」といふ歌も、此消息を語るものである。外物の刺戟、世上の風波、これ皆必要なる吾人が意志鍛錬の

道具である。採つて、以て大に之を利用しなければならぬのである。古人曰く、「世路風霜、是吾人鍊心之境。世情冷淡、是吾人忍性之地。世事顛倒、是吾人修行之資。」と。又曰く、「才能は幽寂の境に於て修め得べきも、品性は世界の大潮流に於て之を鍊らざるべからず。」と。眞に此名言の通りである。

使ふべし、使ふべし、使ふべし

失敗は即ち成功である。失敗を以て單なる失敗となす人には、將來成功の望はない。然し其失敗の碎屑の中より、砂の中に交る砂金の如き成功の要素を認めて、之を捕へ來る者は、遂に失敗を轉じて成功とし、枯野を變じて花の野となす者である。海道一の弓取と言はれた家康も、始めから勝つてばかりゐたのではない。漢の高祖は百戰百敗の將と誹られたが、其お蔭で垓下の戰で最後の勝利を得た。クロムウエルでも、ヂスレリーでも、議會の初舞臺に立つた時は、何れも田舎者として笑はれたものである。古今多くの大文學者も、最初の處女作では多くは其名が立たず、或



は酷評されてゐるものが少くない。落馬も乗馬の上達に必要であり、落選も當選の秘訣をつかむに肝要である。古代人が夢想した錬金術といふものは完全に失敗であつた。然し今日の赫々たる化學の成功は、此失敗したる錬金術より生れたのである。

失敗の経験無くして、大成功をなしたる人は殆んどないのである。よし又假りに有りとするも、其人の成功は、屢々失敗の経験を嘗めたる人の成功に比すれば、其價値の小なるものである。何となれば、たとへ其外面の大きさは同一にしても、甲の内面は擴充せず、乙の内容は充實してゐるが爲である。甲には今後不知不識失敗の淵に近づく危険性があるけれ共、乙には全然其心配がないのである。

失敗は神の遣はせる最良の教育者である。此教育者に導かれて成長したる者は、其經驗深刻にして其意志が強い。加之幾多の失敗を経たる後の成功の愉快は、未だ嘗て失敗したることなき成功者の、夢想だもする能はざるものである。「時」を隔て、眺むれば一切のもの皆美しいとは言ひながら、成功の峰に登つて苦勞の谷失敗の坂を見返すばか

り、美しいものはないのである。旅行に於ても、苦勞失敗の多かつた旅行程、思ひ返して樂の深いものであるが、人間の一生も長い旅行であるからして、矢張り苦勞失敗の多ければ多い程、後に至つて成功の快樂が大である。實に失敗は神の恩恵である。多くの植物が暗い夜間に成長する如く、人間の意志も、暗澹たる失敗中に驚くべき成長を遂げるのである。失敗は恐るべきものでもなく、悲しむべきものでもない。成功の大河は其水源を、暗澹陰鬱なる失敗の谷間に發することを知らば、吾人は寧ろ感謝して此失敗を迎ふべきである。敗れて立ち、敗れて立ち、轉んで起き、倒れて起きて、こゝに絶大の意力が涵養せらるるのである。意志の強き人は、よく之を使ふといふ事は眞實である。然しよく之を使ふが故に其意志が強くなるといふ事は、より以上の眞理である。使ふべし、使ふべし。機械は使ふことによつて減じ、人力は使ふことによつて増すのである。使ふが故に減るものと思ふのは、人間を以て機械と誤認する者である。

□



敢行より貫行へ  
貫行より慣行へ

各人すべて、自分にとつて苦しい仕事があるであらう。其苦しい仕事を敢て自ら進んでなせ。強意を練るの第一は、苦しい仕事にぶつ突かる事

である。厭を厭とせず、嫌ひを嫌ひとせず、強いて、人に強ひられるのではなく、無理に、他人より無理往生に押し付けらるゝのではなくて、其不愉快な事、其苦しい事を敢行するのである。貫行の第一歩は敢行であり、其終局は又慣行である。

冷水浴は寒い。然し寒いと言つて床の中にねてゐては、欲する強意は作れない。グズグズ言はずに跳ね起きて、眞つ裸になり、そして井戸側へ行つて冷水を肩先から、ザブリとかぶるのである。今日かくの如く、明日亦斯の如し。意志は此間に練られるのである。酒をやめるのは苦しい。苦しいと言つて止めなかつたならば、いつ迄経つても飲んだくれであり、いつになつても貧乏者である。然るに其苦しいのをジツと耐へて、人が飲んでも自分は飲まぬ。人が勧めても立てた志は動かさぬ。一日たち二日たち三日たち、一週間になり三週間になつて、だんぐと其苦しさが消滅する。此間に強意が養はれてゐる

るのである。日誌を毎晩記すにも五月蠅日がある。朝早く起きるにも眠い日がある。腹の立つ日がある。書物の讀みたくない日がある。それでも一度日誌を記すと定め、朝早く起きると定め、腹は立てぬ、毎日讀書をすると決定した以上は、親や自分の大病といふが如き大事件に非ざる限り、苦しいとか厭だとかいふ理由によつては止めぬのである。そこに強意の鍛錬が有るのである。勇ましく誘惑の魔と戦ひ、敢て習慣の惰性と對抗して、之に打ち克ち之を征服する處に、強い意志、即ち石心鐵腸が練られるのである。子供ならばいざ知らずであるが、既に青年にもなつた者は、他人の強制束縛で、餘儀なく之に従つてゐると言ふ様ではならぬ。悪習打破の戦争は宜しく自發的たるべし。強意鍛錬の苦行は宜しく能動的たるべし。自ら選び、自ら定め、自ら進んで貫行しなければならぬ。意志を練るは意志を使ふと同じである。而して意志を使ふとは、(苦しい仕事厭な仕事を)敢て行ふと同義である。敢て行ふ也。敢て行ふ也。敢て困苦に突貫する所に、金情鐵意が造られるのである。



名刀を誤用してはならぬ。

□

けれ共、使ふと言つても條件がある。無鐵砲盲目的に、たゞ意志を使ひさへすればよいといふのではない。良薬も用ひ方を誤れば毒薬になり、活人劔も用ひる人を誤れば殺人劔になる。意志の鍛練だつて其通りである。何事でもよ

いから、兎に角使ひさへすれば良いだらう、厭な事をも押し通してやりさへすれば善からうと言つて、食ひたくない飯を一日に五度も六度も無理に食ひ、飲みたくない酒や煙草を無理に飲み、擲りたくもない人が人を擲り、泣きたくもないが強ひて泣くといふが如き、馬鹿氣た事をしてはならぬ。常識のある者は、無論斯の如き誤解をする事はない。たゞ少數の惡戯者や非常識者が、或は此様な誤つた事をせぬとも限らぬのである。嘗て私が或所で一事貫行の話をした。段々と其話をして行く中に、隅の方で、何だかザワつく青年があつた。どうく其青年が、「質問があります。」と言つて立ち上つた。其立ち上つた態度が、眞面目に物を問ふといふのではなくて、如何にも失敬な態度であつた。

た。

私『何でありますか。』

青『今のお話によれば、何をやつても宜しいのですか。』

私『左様です、何でも宜しいのです、何事でも續けてやれば、其人の修養になると思ひます。』

青『それぢや私は、明日から、毎日晝寢をやることに定めます。』

満座皆笑ひ崩れて、ドツといふ聲がした。折角の講演も、此不眞面目な青年の惡戯によつて、茶化されてしまふかと思はれた。然し神は此惡戯な青年をも、捨てさせ給ふやうな事はせられなかつた。

私『さうですか、それでは貴君は毎日何時から何時迄晝寢をなさいますか。』

青『毎日午後の一時から二時の間にしやうと思ひます。』

私『よし定まつた。諸君あの君が是から一年三百六十五日、ごんな事があつても、午後



の一時から二時迄の間、寢通すことにきまつた。私はあの君が何處の誰だか知らな  
いが、皆さんはよく御存じでせう。果してあの君が此一言を守り通すかどうか、能  
く監視して下さい。」

之を聞いて、早くも彼には困惑の顔色が出た。私が、既にかゝる立派な貫行者を得た  
以上、最早講演は徹底したものと思ふから、未だ話したい事もあるが、本日はもう之で  
止めにする。」と言つて其演壇を下るに及んで、彼の責任は一層重大になつた。今は進む  
ことも引込むこともならぬ様になつてしまつた。

此青年は良い人であつた。直ちに悔悟して間もなく私に謝りに來た。第一晝寢その事  
のよくない事も分り、更に又晝寢の貫行などいふ事は、自分も出來ず親も承知せぬ事も  
分り、面白がりの悪戯が、他人への迷惑と自己の恥辱とを招くに過ぎなかつた事も分つ  
て、本心に立ち歸つて謝罪した。否單に謝罪したのみならず、此人は後に眞面目な一事  
貫行者になつたのである。

兎角人間には誤解もあり常談氣もある。随つて人の話を聞き違へたり、或は心にもな  
い悪戯をやつて見たりする事もある。然しながら斯の如きは、何れも戒心すべき事であ  
る。或は「私は毎晩々々酒飲むことを欠かした事がないから、立派な一事貫行者だ」の、  
「余は一日も外出せなかつた夜はないから、夜遊びの貫行だ」なごゝいふが、實につま  
らぬ小理窟である。修養は眞面目でなくてはならぬ。本氣でなくてはならぬ。小理窟屁  
理屈を並べるのは、未だ其眞面目が足らるのである。一事貫行は修養の眞髓を捕へて、  
どこ迄も眞面目、どこ迄も一生懸命の本氣で貫かうといふのである。かゝる屁理窟小理  
窟は、害にこそなれ寸益もない。一事貫行の目的物は、どこ迄も善い事、善い物でなく  
てはならぬ。善を進めて悪をとゞめる自己改造の一條件たることを要するのである。眞  
面目になれ、眞面目になれ。眞面目をどれば一切の修養悉く零である。



### 第六章 徹底的解決を得よ

徹底とは  
何ぞや

修養は徹底を期する。研究も亦徹底を要する。而して我が一事貫行は、即ち此徹底の指導者である。

徹底とは底迄とゞく事である。根元まで溯ることである。源泉までつき込むことである。やり遂げることである。中途半端でなく、宜い加減でなく、人前でなく、中ぶらりんでなく、事物の根本、根元、根底に、喰ひ入り、突き入り、透入 (Penetrate) することである。即ち理智の上からは根本的研究にまで進入し、感情の上からは自己衷心の満足を標準として、笑はれても嘲られても恐れず痺まず勇進し、實行の上からは全人格的努力、即ち命がけで以て働くのである。而して之を成さしむるものは何かと言へば、

強意である。徹底の第一要素は強い意志である。人の機根に練達の遅速はあつても、強意でもつて集中し持続し、命がけの工夫を凝らして取り懸れば、徹底せぬことはないのである。

上よりでは何時になつても徹底はせぬ、他人の命令や責罰を恐れて、厭々ながら仕事をし、或は又他人の賞讃や喝采を目當として、人前を飾りつゝ、見せびらかしの仕事ばかりをしてゐては、徹底はせぬ。慰み半分や上つ調子で、やつて見たりやらなんでもみたり、兎糞馬糞の切れ／＼に仕事をしてゐては、徹底はせぬ。徹底は命がけの繼續一心不亂の持續にある。科學上の眞、道德上の善、藝術上の美、肉体上の健、何れも皆一生懸命の持續によつて、其奥底に達するのである。其堂奥に上るのである。

眞の一事は即ち  
眞の徹底である

徹底の要件は一事である。全精力を集中せざれば徹底せず、而して全精力を集中するには一事に限る。一つでよい。一つで十分だ。否一つに限



る、たゞの〇〇一つに限る。其〇〇一つに〇〇全力を〇〇こめ〇〇全心を〇〇打ち〇〇込む〇〇のである。ピツタリと〇〇其〇〇仕事〇〇一つになり〇〇きつて〇〇しまふ〇〇のである。仕事〇〇が〇〇我〇〇か、我〇〇が〇〇仕事〇〇か、水〇〇が〇〇波〇〇か、波〇〇が〇〇水〇〇か分たんと〇〇しても〇〇分〇〇つ能〇〇は〇〇ざる〇〇境涯〇〇に〇〇没入〇〇しなければならぬ。名人〇〇と言〇〇はれた〇〇或〇〇俳優〇〇が言つた。〇〇「見物〇〇が〇〇少〇〇いから〇〇とて〇〇藝〇〇を〇〇疎末〇〇にする〇〇様〇〇な者〇〇は、到底〇〇上手〇〇には〇〇なれ〇〇ませぬ。眞〇〇に〇〇名人〇〇となる者〇〇は、見物〇〇の〇〇多〇〇い少〇〇いに〇〇不拘〇〇、見巧〇〇者の〇〇有〇〇る無〇〇しを〇〇思〇〇はず、たゞ〇〇一〇〇心〇〇不〇〇亂に、自分の〇〇心〇〇に〇〇満〇〇足〇〇の〇〇得〇〇られる迄、熱心〇〇に〇〇やり〇〇通〇〇す人〇〇である」と。之〇〇眞〇〇に〇〇味〇〇ふ〇〇べき〇〇言〇〇である。ま〇〇こ〇〇この〇〇教育〇〇者〇〇は〇〇教育〇〇教授〇〇と〇〇一つ〇〇になる。ま〇〇こ〇〇この〇〇藝術家〇〇は〇〇繪〇〇畫〇〇なり〇〇音〇〇樂〇〇なりと〇〇一つ〇〇なる。ま〇〇こ〇〇この〇〇道徳〇〇家〇〇は〇〇善〇〇行〇〇其〇〇物〇〇と〇〇一つ〇〇になる。此〇〇人〇〇等〇〇にとつては、教育〇〇なり〇〇藝〇〇術〇〇なり道徳〇〇なりが、自分〇〇の〇〇親〇〇であり、子〇〇であり、妻〇〇である。こゝに〇〇於〇〇て〇〇か〇〇眞〇〇に〇〇教育〇〇の〇〇爲〇〇の〇〇教育、藝〇〇術〇〇の〇〇爲〇〇の〇〇藝〇〇術、道徳〇〇の〇〇爲〇〇の〇〇道徳〇〇といふ〇〇もの〇〇が〇〇生〇〇れて〇〇くる。こゝに〇〇眞〇〇理〇〇の〇〇發〇〇見〇〇が〇〇あり、こゝに〇〇神〇〇秘〇〇の〇〇示〇〇現〇〇が〇〇ある。徹〇〇底〇〇は〇〇茲〇〇に〇〇到〇〇つて〇〇存〇〇するのである。事〇〇業〇〇其〇〇物〇〇と〇〇一つ〇〇にならず仕事〇〇其〇〇事〇〇になり〇〇切〇〇らずしては、徹〇〇底〇〇は〇〇あり〇〇得〇〇ない。眞〇〇の〇〇成〇〇功〇〇は〇〇あり〇〇得〇〇ないのである。一

事〇〇に〇〇集〇〇中〇〇せよ、一〇〇事〇〇に〇〇執〇〇着〇〇せよ。眞〇〇の〇〇一〇〇事〇〇は〇〇即〇〇ち〇〇眞〇〇の〇〇徹〇〇底〇〇である。而〇〇して〇〇徹〇〇底〇〇とは〇〇即〇〇ち眞理〇〇の〇〇根〇〇を〇〇と〇〇り、全〇〇生〇〇命〇〇の〇〇綱〇〇を〇〇握〇〇ることであるからして、一〇〇事〇〇は〇〇や〇〇がて〇〇萬〇〇事〇〇である。故〇〇に〇〇眞〇〇に〇〇一〇〇事〇〇を〇〇得〇〇る者〇〇は〇〇萬〇〇事〇〇を〇〇得〇〇、眞〇〇に〇〇一〇〇事〇〇を〇〇得〇〇ざる者〇〇は、何〇〇物〇〇をも〇〇得〇〇ることが出来〇〇ない事〇〇になる〇〇のである。

深く、深く  
深く掘れ。

文明〇〇は〇〇徹〇〇底〇〇的〇〇解〇〇決〇〇の〇〇集〇〇積〇〇である。中〇〇途〇〇半〇〇端〇〇や〇〇生〇〇嚙〇〇りの〇〇研〇〇究〇〇實〇〇行〇〇が〇〇ど〇〇れ〇〇程〇〇にあらうとも、眞〇〇の〇〇文〇〇明〇〇は〇〇な〇〇い〇〇のである。一〇〇反〇〇の〇〇田〇〇を〇〇一〇〇面〇〇に〇〇淺〇〇く〇〇掘〇〇つて〇〇みた所〇〇で、滾〇〇々〇〇と〇〇して〇〇清〇〇水〇〇の〇〇空〇〇湧〇〇する〇〇事〇〇は〇〇な〇〇い。僅〇〇か〇〇一〇〇坪〇〇の〇〇土〇〇地〇〇でも〇〇よ〇いから、深〇〇く〇〇掘〇〇るならば、そ〇〇こに〇〇清〇〇水〇〇が〇〇噴〇〇出〇〇するのである。百〇〇の〇〇林〇〇檜〇〇の〇〇落〇〇ち〇〇るの〇〇を〇〇見〇〇ても、そ〇〇れ〇〇で〇〇地〇〇球〇〇の引〇〇力〇〇が〇〇發〇〇見〇〇せ〇〇られる〇〇もの〇〇では〇〇ない。僅〇〇か〇〇一〇〇個〇〇の〇〇林〇〇檜〇〇で〇〇よ〇い。たゞ〇〇其〇〇一〇〇個〇〇を〇〇觀〇〇察〇〇して、此〇〇物〇〇の〇〇落〇〇ち〇〇る〇〇所〇〇以〇〇に〇〇徹〇〇底〇〇すれば、あ〇〇ら〇〇ゆる〇〇物〇〇体〇〇の〇〇落〇〇ち〇〇る〇〇理〇〇由〇〇が〇〇分〇〇るのである。醫〇〇術〇〇の〇〇進〇〇歩も、化〇〇學〇〇力〇〇學〇〇の〇〇進〇〇歩も、農〇〇耕〇〇の〇〇進〇〇歩も、文〇〇學〇〇の〇〇進〇〇歩も、進〇〇歩〇〇といふ〇〇進〇〇歩は、す〇〇べ〇〇て〇〇徹〇〇底



的の解決を俟たなければ成就する者ではない。一方面でよい、一現象でよい。野菜の研究でもよい。果樹の栽培でもよい。肥料の配合でもよい。家畜の飼養でもよい。飯の焚き方でもよい。洗濯の仕方でもよい。育兒でもよい。家計でもよい。早起でもよい。規律でもよい。禁煙でもよい。禁酒でもよい。其方面其範圍はどの位狭くてもよいから、兎に角一事をやり遂げなくてはならぬ。兎に角一事に徹底しなければならぬ。萬金丹や仁丹では何にもならぬ。すべての病氣にきく薬は、言ひかへればどの病にもきかぬ薬である。其様な薬がたとへ山程にあつても、人間の病氣は直らず、人類の健康は増進しない。それと同様に、仁丹式萬金丹式の知識や經驗がどれ程にあつても、其様なもので社會の開化は出来ぬのである。文明の進歩は左様なものでは遂げ得ないのである。

順序を追ひ、  
秩序を保つて

小積んで大となる。水の滴も海となり、塵もつもつて山となる。小事を侮らず些事を忽にせず、一つ解決し、二つ解決し、三つ解決して、一步

又一步、一日又一日、究明まで、完成まで、習慣まで、慣行まで、やつて／＼やり通す者は徹底する。此人が眞の勇者であり、此人が即ち強意の人である。一事一物、専心努力、易より難に、簡より繁に、外より内に、口より奥に、順序を追ひ秩序を保つて、中止せず廢止せずに進むのである。一時に二兎を追ふこと勿れ。兩手に花を夢想すること勿れ。一つを守るべし、一つを主とすべし。一は始めにして同時にすべてである。一切といひ、一生といひ、一天といひ、一統といひ、一般といひ、一命といふ時、一は總べて全体を意味してゐる。一書を讀破するは萬卷の書を粗讀するに勝る。一人の親友を得るは萬人の朋輩を得るに勝る。一書の眞理は萬卷の眞理と差異なく、一人の親友を得る道は、やがて萬人の味方を造るの道である。一字を巧に書く事の出来る人は、萬字を巧に書く事が出来る様になる。一つの音楽に熟達するは、一つの音楽に上達するの本である。一事は即ち萬事、一徳は即ち萬徳。一を得よ、一を得よ。一事を得れば即ち萬事を得る事が出来る。故に萬能を追ふ者一能を得ず、一能を守る者よく萬能を得るのである。



困難大明神  
辛苦八幡宮

一事を貫く意志の力は、萬事を貫く意志の力である。我をして早起を貫行させる意志は、我をして禁酒をも貫行させる意志である。我をして早起、禁酒を貫行させる意志は、我をして親孝行、貯金、讀書、體育のあらゆる善事を、貫行させる意志である。一個の蒸氣力電氣力は、汽車をも電車をも、汽船をも米搗機をも、動かすことが出来る。其と同様で、一個の強意は、以てあらゆる善事を完成することが出来るのである。

人には二個の創造者が在る。神と彼自身とが之である。神は原料と法則とを授け給ひ、人は自ら意志を働かして事物を造り出すのである。いかに原料はあり法則は分つてゐても、意志の無い所には何等の發展も不可能である。歩く足は有つても、歩く氣のない人間は仕方がない。神秘を開く智慧はあつても、開く氣のないものにかけて來るためしはない。故に人にとつては意志は一切であり萬事である。一個の意志は人事の總てを支配

する。一事に打ち勝つ意志の力が、やがて萬事に打ち勝つ意志の力に外ならぬのである。一事に向へ、一事と戦へ。たゞの一事を貫け、たゞの一事を打ち従へよ。やればどうせ困難はあるが、困難を恐れてゐては仕方がない。戦陣の苦勞なくして勝利はない。奮闘の辛苦なくして成功はない。其辛苦其困難こそ神の恩恵であり、御佛の慈悲である。偉い人は皆苦勞をする。天之將に大任を此人に降さんとするや、先づ其心志を苦しめ其筋骨を勞せしむ。と、孟子に曰つてある通りである。困難辛苦程人を眞面目にして呉れるものはない。生れて一度も大なる困苦に出遭つたことのない人には、眞面目とは如何なるものか、其味が分らぬのである。困苦と眞面目と成功とは、結局一つの道筋である。困苦は厭ふべきものではない。喜んで迎へるべき事である。困苦が汝の意志を強くし、汝の精神を眞面目にし、依つて以て人格の修養と事業の完成とを得せしむるのである。困難大明神！困難大明神！辛苦八幡宮！辛苦八幡宮！此大明神、八幡宮を朝夕に念じて當面の一事一事に全力を集中し、以て所期の目的に勇往邁進せなければならぬ。



個人も、家庭も、町村も、國家も  
 個人の修養も一事貫行でやるべし。家庭の改善も一事貫行でやるべし。國運の進展も一事貫行で行ふべし。町村の改良も一事貫行でやるべし。

一事貫行は何處へ向けても使ふ事が出来る。一事貫行の應用適用は、種類も範圍も無限に廣い。毎日、日誌・日計簿を記すとか、親孝行をするとか、人の惡と己の善を言はぬとか、自適強健術を行ふとか、書物を讀むとか、間食を慎むとかいふが如きことは、個人的に行ふ方が便利であらう。早起、貯金、禁酒、禁煙等の如きは、個人的にも、家族的にも、部落的町村的にも行ふ事が出来る。近頃は地方改良とか、民力涵養とか言ふ事が盛に唱へられて、舊來の惡習を打破せしめやう、新しき理想の文化的生活に進ましめやうとする努力が、各地到る處で熱心に試られてゐる。私等兩人も、常に此種の團體から招待されて講演に出る。然し此間に於ける私等の經驗を率直に申せば、多くの地方では此種の奨勵宣傳が、尙十分の効果を奏しては居らず、何かと言へば、失敗に近いと

申すべき所も少くはない。而して其不成功失敗の原因たるや、もとより一にして足らないであらうが、若し吾人の推察する所にして誤りなくば、其主因は、一時に多くを望むといふ事にあるであらう。敬神尊祖もやらせなくてはならぬ。祭日には國旗も出させなくてはならぬ。軍人退營の土産物は廢止、嫁入の際に於ける嫁資には制限をつける。貯金も奨勵、時間勵行も奨勵、公設市場だ、産業組合だ、衛生だ、廢物利用だ、何だ彼だど、少い所で十數ヶ條、多い所は數十乃至數百にさへ及んでゐる。元より此中のごのの一つも無用のものとは無からうが、千手觀音様でもない我々人間に、其様にアレコレと言つた日には、目のまふ外には効果はない。諺にも二兎を追ふてさへ一兎を得ずと誠めてあるに、六十七といふ夥しい數を追ひ廻して、どうして之がとれるものか。一事に限る一事に限る。先づ時間勵行なり共同貯金なりを行ふとすれば、役場も宣傳する、學校も宣傳する。いざ其日其時間といふ折には、寺院では鐘を叩いて人に知らせ、神社では太鼓をたゝいて村民を促す。軍人會なり青年會なりは、各會員の狩り出しでもやる。巡查



も區長も町村會議員も之を應援するといふ位にやる。所謂町村總動員の覺悟でやる。一事に全力、一事に集中。かくて一回二回三回と斯の如き事を行へば、後はだんくど樂になつて、命せずとも行はれ、令せずとも守られることになる。一つに成功して後他事に移る。次は酒杯の交換を禁止するなり、嫁入道具を制限するなり、行り宜い事から段々と行り難い事に進んでゆく。かくていつの日か全部が完成する事になる。一事を貫く意志の力は、萬事を貫く意志の力也。此理は個人に於ても家庭に於ても、或は町村國家に於ても、聊か變る所がない。

同一事項でも、異つた事項でも

全然個人的に行ふものは、自分が定めて自分が守るだけの事で、元より簡單容易であるが、若し之を前記の如く團體的共同的に實行するといふ場合には、其實行事項が、一つの時と多くの時との両者があり、且つ純個人的に比べて複雑である。例へば諸君の家庭で、本日より一事實行を始めるとするに、食後には老人

から子供迄、皆揃つて咳嗽をしませうとか、朝起きれば皆佛壇の前に座つて、祖先に禮拜しませうとかいふ時は、之は家族全體に對して、實行事項が一つである。然るにお爺さんお婆さんは、毎朝伊勢大廟を遙拜する、一事實行、お父さんは禁酒、お母さんは日誌、お千代は讀書、太郎は體操、三郎は日曆を一枚づゝめくることの一事實行といふ時は、家族全體一人漏なく行けるけれど、實行事項は一つでなくて色々である。前者でもよい、後者でもよい。家内全體が相談して、都合のよい方必要な方を行ればよいのである。學校等でも亦此通りである。小學校でも中學校でも、師範學校・農學校・商學校・女學校でも、乃至は商店・官衙・工場・會社等に於ても、食前體操なり、冷水摩擦なり伊勢大廟の遙拜なり、毎月若干の貯金なりを、全員揃つて行ふてもよい。或は各人てんでに何かの一事を選択して、十人十色百人百色、思ひくりに我劣らじと助けつ勵みつするのによい。要は一事である。貫行である。眞面目である。徹底である。辛いからとて恐れず臆せず、出來たからとて油断せず慢心せず、根本を目ざし根底を志して、敢



行即貫行、貫行即貫行、而して貫行即無貫行となる所迄進まねばならぬ。

眞忠は忠を忘る念々たゞ忠。眞孝は孝を忘る念々たゞ孝。之が即ち徹底である。最後の成功である。孔子曰く、「七十にして己の欲する所に従つて矩を踰へず。」と。之ぞ即ち人間究竟の理想、道德的人格の完成である。果樹ならば彼の人に尋ねよ、町村指導ならば此人に教を乞へ、肺病ならば何々博士に診てもらへ、音楽ならば何々女史の演奏を聴けと人に言はるゝ様になれば、これ即ち一學、一事、一業の徹底である。神の智恵神の技能の、人に顯れた所である。微なりと雖、小なりと雖、愛する讀者よ、志ある同胞よ、一事の奥底まで、一事の徹底まで、とりぐに適所を取つて、直ちに立つて猛進せよ。

### 第七章 習慣養成の原理



自然的、悟性的、理性的、

吾々人間の意志は、道德上から見て、之を上中下の三段に分ける事が出来る。下等の意志は、感情の起るがまゝ、欲望の向ふがまゝに、悲しければ泣き、腹立てば打ち、食ひたければ食ひ、寝たければ寝るといふ風に、何等の反省検束をも加へないものである。之を稱して自然的意志といふ。人間以下の動物は、下等であれば下等であるだけ、より多く此自然的意志によつて行動してゐるものである。が、萬物の靈長と言はるゝ人間の中にも、時々此禽獸の部に數へらるべき人もないでは無。第二の意志は之を悟性的意志をいふ。此方は前者の如く、全く感情欲望の發作に任せるものではなくて、一先づ實行の前に、行るべきか行らざるべきかと考へてみるだけの餘裕がある。然ながら其行る行らぬの標準は、たゞ／＼自己の利益又は損害といふとだけであつて、それ以上の高き標準を有せざるものが、此悟性的意志である。行つて利益になることならば大に行らう。然し行つて損になるならば、やりたくとも止ようといふ譯で、其思慮決斷は、一に懸つて自己の利害成敗の上存するのである。例へば代



議士が議會に於て、或議案の賛否の意見を決するに、たとへ其事が國家並に人民にとつて必要な事であつても、自己の利益に反する時は反對し、或は又たとへ其事が國家並に人民にとつて、不利益の事と信じてゐても、自分の私利に一致する場合には大賛成するといふが如きは、即ち第二の悟性的意志である。而して此悟性的意志は、第一の自然的意志に比ぶれば、多少複雑な經過があるだけ進んだものとも言へるのであるが、乍然犬や猫でも、自己の利害で動く位の判断はする。未だ之を以て、眞に人間らしいと言ふ事は出来ぬのである。

最上の意志は理性的意志である。總べての行動を、善いか悪いかの標準に照して、善い事ならば進んで行り、悪い事ならば退いてせぬといふ意志である。其動くや情慾に非ず、衝動に非ず、得失にも存せず、成敗にも依らず、唯一の主眼は、即ち正邪善惡に存するものである。之こそ眞に人間らしい意志であつて、修養し鍛錬して、愈々強大堅固とならしむべき意志は、正に此理性的意志に外ならぬのである。

**習慣とはどんな事か。**

意志は自らの習慣性を造る。一度行つた事は二度行りたく、二度行つた事は三度行りたくなるものである。而して一度出来上つた習慣は、善かれ悪しけれ、之を變へる事は中々の難業である。吾人が日常行動の九分通りは、すべて既成の習慣の結果であつて、習慣の良否は、即ち其人の全價値を評定するに足るのである。而して此意志の習慣——普通には、意志の習慣といふ時の意志のといふ字だけを取り去つて、たゞ單に習慣とのみ言つてゐるもの——の總體を呼んで、其人の品性即ち Character と言ふのである。品性は習慣の總體であり群體である。或は之を意志の記憶の集りと稱してもよい。東洋の諺に「習性となる。」と言へるものは、即ち習慣が品性となり天性となることを指したものである。英吉利の學者ジョン・スチュワート・ミル(J.S.Mill)は、「品性とは、畢竟完全に形成せられた意志に外ならぬ。」と言つてゐる。而して凡そ其人が道徳的に價値有るか無いか、善人か悪人かを判定するには、個々の行爲によるよ



りも、寧ろ其人の品性によるべきである。そして此道德的判斷の對象たるべき品性は、一つ一つの行動の部門に於ける、意志の習慣によつて成立するものであるからして、既成の悪習慣を打破して、新しく善き習慣を養成する爲には、吾人は全力を之に傾注しなければならぬのである。

一體習慣とは何であらう。平たく之を言へば、吾人の意志の中に出来た所の、同じことを繰返したくなる傾向である。朝早く起きる習慣の人は、朝早く起きないと不快であり、毎晩酒を飲む人は、酒が飲めぬと物足らぬ。つまり習慣とは、経験の結果として生じたる強き聯合である。更に之を生理的に言へば、神経系統の單位をなす神経原と神経原との間に、神経衝動の一聯絡線が開通されて、甲といふ刺激に對して、常に乙といふ反應を引き起す様な、通路の出来た事である。故に喫煙の習慣のある者は、煙草のことを思ふか、乃至煙草の在るのを見た時には、之がのみたくて仕方がない。即ち煙草の知覺と之を吸ふ運動もしくは口中の感覺との間に、強い習慣的聯合が成立したから

である。



人格の改造は習慣の改造に在る

習慣程恐ろしいものはない。どれだけ人が體裁を飾つて、一時的に人目を胡麻化さうと思つても、其身に根深く植ゑ付けられた習慣は、いつか其本性を暴露せずには置かぬのである。下女をしてゐた頃に摘み食ひの癖をつけた人は縁あつて玉の輿に乗り、良家の奥様になつてからも、チヨイと摘み食ひの癖が出る。故に畢竟は、頭かくして尻隠さずといふ事になる。だから人は「お里は争へぬものだ。」といふ。眞にお里は争へぬもの、偽れぬものである。だから眞に人間が良くなり立派にならうとすれば、根本的徹底的に、習慣からして直して來、習性からして築き上げねば駄目である。清盛ではないが、鎧の上から法衣を着ても、下の鎧が遂には見えずに置かぬのである。故に人格改造の根本は、即ち習慣改造の事業である。而して此習慣改造の最良方法は、實に我が一事實行に外ならぬのである。



大脳皮質中の獲得連絡線。

習慣は最少抵抗の法則の一つである。最少抵抗の法則といふのは、宇宙間すべてのものは、其動くや常に、抵抗の最も少い所に向つて進み、事である。彼の雨の水が流れるのを見るに、常に少しでも低い方へを選んで行く。故意に力の加へられた時は、イザ知らず、若しも事物が自然のままに動ならば、風の吹き、人の行き、花の散るまで、皆其物にとり、最少抵抗の道を選んで進むのである。

習慣も即ちそれであつて、總ての神経原が活動する時には、——換言すれば一つの神経原が一定の刺激を受けて、之を神経衝動として、他の神経原に傳達する時には、——其衝動を最少抵抗の連絡線に沿ふて傳達するのである。故に最小の抵抗線は、つまり最強の連絡線と同義である。其連絡が強ければ強いだけ、其抵抗は少いのである。而して同一の行爲を三回よりは五回、五回よりは十回と、繰返せば繰返す程、其連絡は強固になり、随つて其習慣は牢乎となる。

人體に於ける神経衝動の連絡線には、三つの階段がある。第一段は脊髓の連絡線、第二段は低脳ていなんの連絡線、而して第三段は大脳皮質だいなうひしつの連絡線である。是等は何れも感官と筋肉との通路であつて、其異なる所は其連絡が簡單であるか複雑であるか、又は直接的であるか間接的であるかといふだけの違ひである。而して此三個の連絡線の中でも、脊髓及び低脳ていなんの兩者は、生てから後、之をよりよく開通させ發達させる希望の少いものであるが、大脳皮質だいなうひしつの中に於ける神経原間の生具連絡線は、前兩者に比べて、遙に多くの可塑性かそくせいを持つてゐるのである。即ち此處に於ては、多數の可能的聯絡線があるからして、自分の努力によつて開かうとさへ思へば、いくらでも新に開くことが出来るのである。或は又特に自分で開かうとは思はなくても、不知不識同じ行爲を繰り返してゐる中には、いつの間にか此連絡線が開かれてしまふのである。私等が通常習慣と稱してゐるものは、實に此可塑性を生後に於て固めた所の、獲得連絡に外ならぬのである。



習慣の偉大な  
る効果を見よ

習慣性は、人間に必要あつて出来るものである。だから或人が自分の悪い習慣に苦しめられてゐるからと言つて、習慣性その物を悪く言ふのは的外れである。悪いのは習慣性そのものではなくて、悪い習慣を造り出した其人の咎である。若し私等に習慣性といふものがなければ、各人の能率はどれ程減るかも分らんである。

彼の工場に働く職工が、終日重い槌を振り上げて、少しも疲ないのはどういふ譯か。彼の車夫が一日中人を乗せて四方を疾走し、而も平然として晚餐の卓につく事の出来るのは何故であるか。學者が書を讀んで疲れず、演説家が長廣舌を振つて困憊せず、旅館の下女が遅寝早起をして弱らず、銀行家が終日十露盤の玉を弾いて少しも誤りを生ぜざるは如何。これ皆同一の仕事を毎日反覆する結果造られたる、習慣の力ではないか。將又吾人は何が故に、百人一首の歌がるたを取る時に、上の句を一語二語聞くと否や、飛電の如くに其下の句を拾ふことが出来るのか。何故に琴・笛・ピアノ・オルガンが、か

くも巧妙に奏し得らるゝのか。或は又自由自在に、船の舵・飛行器や自動車のハンドルが操縦し得られ、タイプライターの盤を叩く事が出来るのか。これ皆神經原間に於ける連絡線の通路が、自由自在に開かれたる結果ではないか。其の他勤勉の習慣、讀書の習慣、規律の習慣、早起の習慣と、造らねばならぬ善き習慣は幾らでもあるのである。習慣は人に必要である。たゞ注意すべきは、悪しき習慣を造らざる事である。若し夫れ既に悪しき習慣を造つて、之を悔い且つ之を除かんことを望む人があるならば、奮起一番意を決して、此悪習打破の自己戦争を開くがよい。若し諸君にして我が一時貫行の宗徒となるならば、此悪習打破の自己改造は、必ずや成功するに相違はないのである。



反覆則と  
最新則

善き習慣は如何にして造り得らるゝものであるか。私は此問題を明瞭にする爲に、先づ一般に吾人の習慣が、如何なる法則によつて形成せらるゝかを語るであらう。



先づ第一は反覆則である。反覆則といふのは、若し他事を同一とするならば、最少抵抗線は、神経衝動が頻繁に通過した連絡線であるといふのである。一度より五度、五度より十度、十度より百度と、同じ衝動が通過すれば通過する程、更言すれば同じ動作を繰返せば繰返す程、其習慣性は牢乎たるものとなるのである。初めは辛かつた酒が後には甘くなり、第一回には苦くて、仕方のなかつた煙草が、遂には無くてならぬ様になり、最初には苦しかつた冷水浴が、今ではせぬと氣持が悪いといふ様になつたのは、何れも皆毎日、反覆し繰返したからである。思はず知らず同じ仕事を繰返してゐる中に、或は又悪い事だから止めよう、と思ひながら續けてゐる中に、いつしか大盤石の習慣の根を下す様になるものである。之が第一の原則である。

第二の原則は最新則である。最新則といふのは、若し他事を同一とするならば、最少抵抗線は、最も新しく開通された連絡線に定まるといふ事である。新しいものは有力であり、古いものは力が弱い。此法則の存するによつて、長い間の悪習打破も出来るの

である。例へば五年十年朝寝をしてゐた人も、一朝朝早く起きると、次の日も亦早く眼の開く傾向がある。此傾向を捕へて三日五日十日と續けて行く中には、段々と早起の習慣が強なつて、朝寝の連絡線は之に打ち負かされて来るのである。だが之と同じ理によつて、善い習慣の破壊される事もあるから、注意しなければならぬ。十年止めた禁酒家が、一夜の宴會から元の酒飲になり、五年續た水浴が、或日の風邪から廢止されたといふ様な事も、よく聞く話である。勿論風邪に罹れば、一時は水浴も中止しなければならぬまいが、こゝに最新則が働いて、一日や二日やめる其中には、ツイ行ふことの厭はしくなるもの故、風邪が直れば再び勇ましく、元々通りに水浴を實行することが必要である。千丈の堤も蟻の穴から崩れるといふからして、成るべく貫行には例外を作らぬやう若し又止むなく一日二日の例外を作つたならば、其事情の無くなると共に、勇を鼓して前の事項を繼續敢行しなければならぬ。僅かの例外は軽い事の様で、實は軽々に見過し難きものである。故に一事貫行は又の名を、無例外主義ともいふのである。



最強則と  
効果則

第三は最強則である。最強則といふのは、若し他事を同一とすれば、最少抵抗線は、最も強い刺戟の通過した線に定まるといふ事である。故に新しき善習慣を造らんとし、又は舊き悪習慣を打破せんとするならば、吾人は出来るだけ其最初に當つて、鞏固なる決定的精神を以て、之を敢行することが必要である。脊水の陣を張り必勝を期して事に臨むは、成功の最大要件である。彼の煙草を廢せんとする人が一度思ひ立つて煙管を折つても見、二度思ひ立つて煙草入を他人に與へてもみたが、どうも思ひ切りが悪くて未練が残り、戀々の情忍ぶに由なくして、再び新しく之れを買入れるといふ様な事がある。かくの如きは即ち最初の決心が鈍いからである。斯様な人は大に他人から嘲笑されるか、さもなければ、鐵拳の二つ三つも見舞はれる方がよい。さすれば悲憤悔悟の念ムラ、いと燃え立ち、随つて禁煙に對する刺戟が強くなる譯である。飲酒家なども之に類した失敗を度々するが、かゝる失敗を幾度も繰返してゐる中に

は、遂には此失敗が習慣となる恐れがある。故に一度思ひ立つた以上は、十分の工夫をして、最も強き刺戟を造り、かくて斷々乎として、之を貫く事を心懸けねばならぬ。

第四の原則は効果則である。此原則は、若し他事を同一とするならば、最少抵抗線は、最大の満足を持ち來す線であるといふ事である。或事の結果が、嬉しかつたとか、愉快であつたとか、利益が多かつたとか言ふ時には、次にも其事に誘引さるゝ傾向が生じ、之に反する場合には、之を厭ふ傾向が生ずる。然し一事貫行の結果は、多くの場合、直ちに顯著なる効果の表はれるものではない。菓子を食つて甘かつた、湯に入つて氣持が良くなつたといふやうに、觀面に其影響があるものでなく、累積の効を積んで、漸次其効顯の表はれて來るものであるからして、之を行ふ本人は、自分で堅く其事の効果を信じて取り懸るべく、又子供等の行ふ場合には、事實の效果に代ふるに、賞讃の褒辭を以て之を獎勵すべきである。



同志よ、勇まし  
く奮闘せよ。

以上の外、尙習慣形成の原則として擧ぐべき二三のものが無いではないが、餘り重要なものでもないからして、便宜此處では之を省略する事にす。之を要するに、上に掲げた四個の原則、即ち反覆則・最新則・最強則・効果則の四つは、善習慣を創始するに就いても、悪習慣を撲滅するに於ても、當然之に則らなければならぬ原理である。即ち禁酒なり禁煙なり早起なり體育なり、後章掲ぐる所の一事貫行百例中のどれか一つを行ふといふ際には、個人的でも社會的でも、先づ最新則によつて、一つの新しい連絡線を開始する。而も其着手は最強則によつて、最も強き決心の下に行はれ、且つ効果則によつて、其事業の偉大なる効果を、確信する事が必要である。かくて一度最新の異例を用いて、舊生活の堡壘の第一線を突破したるものは、爾後反覆則を遵守して、日々同じ動作を繰返すのである。此時に於ては、勝てば官軍負ければ賊である。敢戦奮闘して、自制克己の凱歌を聞くを樂みにせよ。悪習慣の強敵、たとへ狐狸の如く狡猾に、又は長髓彦の如く頑強に戦ふども、到底いつ迄も、威風堂々たる正義

の軍に、刃向ひ得るものではなく、日の長びくと共に漸次其力を弱め來つて、遠からず降服するに相違はない。さらば即ち悪習慣の全壘を破壊し全山を占領して、山の頂空高く、善習慣の日章旗を、風に翻すに至るであらう。

### 第八章 一事貫行百例

熱慮  
行せよ

最後の問題は實行である。上章縷々述べ來りたる所によつて、我が一事貫行の主義精神は分つたが、然らば貴下は果して何事を、自己の一事貫行として採擇せんとするか。數ある中の唯一つ、貴下が自己の性質上、境遇上、體格上、職業上、最も適當と認むる所の只一つは、はたして如何なる事項であるか。吾人は、貴下が其貫行の一事を選擇して下さる御便利の爲に、下に一事貫行の百例を選んで、之を列



擧きよするであらう。先まづ身體しんたいを強つよくするか、先まづ才能さいのうを練磨れんまするか、或あるひは善ぜんの修行しうぎやうに向むかふか、富とみの蓄積ちくせきに進すすむか、消極せうきよく的てきか積極せききよく的てきか、それは貴下きか自身じしんの決定けつてい如何いかんに俟まちつ外ほかはないのである。他人たにんの良よき結果けつぐわを見習みならふことも、大おほいに有益いうえきの事ことである。然しかし盲目まうもく的てきに、他人たにんがあれをやるから自分じぶんもあれをやるでは面白おもしろくない。貴下きかには貴下きかの行ゆくべき道みちがなければならぬ。探さるべき一事いちじがなくてはならぬ。よくよく考かんがへて、そして勇進ゆうしん敢行かんかうして下ください。熱慮じゆくり斷行だんかう！熱慮じゆくり斷行だんかう！其熱慮そのじゆくり斷行だんかうを、切せつに切せつに諸君しよくんに希望きぼうする次第しだいである。

強きやう

- 一、早寢はやね早起はやおき（豫あらかじめ時間じかんを、何なんじ時じと定さだめて置おくを可かとする。）
- 二、冷水浴れいすゐよく又は冷水摩擦れいすゐまさつ（身體しんたいの弱よわい中うちは、水浴すゐよくよりも摩擦まさつがよいであらう。一層弱いっそうよわい中うちは、乾布摩擦かんぶまさつでもよい。）
- 三、每朝まいあさ體操たいさう（櫻井式紳士體操さくらゐしきしんしんたいさう、中井式自強術なかゐしきじきやうじゆつ、川合式強健術等かわあひしききやうけんじゆつどう、何いづれにても自己じこ

に適てすると信しんずるものを行おこなへばよい。）

- 四、静座せいざ若もしくは腹式呼吸ふくしききふ（なるべくは朝あさが良よい。然しかし静座せいざなどは夜間やかんでも差支さしつかはない）
- 五、每朝まいあさ冷水一杯れいすゐいっぱいを飲のむこと。
- 六、自分じぶんで床とこを上げ、或あるひは掃除さうじをすること。
- 七、禁酒きんしゆ。
- 八、禁煙きんえん。
- 九、二食主義にしよくしゆぎ（激はげしい勞働らうどうをする人ひとには、二食主義にしよくしゆぎは困難こんなんであらう。しかし官吏教育くわんりけういく者等しやどうには、決けつして困難こんなんではない。）
- 一〇、間食かんしよくを廢はいすること。
- 一一、必ず飢うえて食しよくし、未いまだ飽あかずしてやめること。
- 一二、性慾せいよくを慎つしむこと。
- 一三、寢床ねどこに入はいつて後のちは物ものを考かんがへぬこと。



- 一四、毎日必ず體育に關する書を讀む事。
- 一五、健康日誌をつける。若しくは健康測定表を調製すること。
- 一六、常に丹田に力を入れること。
- 一七、襟巻手袋を用ひぬこと。
- 一八、食物はよく咀嚼すること。
- 一九、食後には口嗽をする事。
- 二〇、毎晩寝る前に齒を磨く事。
- 二一、徒歩主義。(遠距離又は止むを得ざる事情の外は、徒歩で用事をすますること。)
- 二二、姿勢を正しく保つこと。
- 二三、便通をよくすること。
- 二四、其日の疲勞は其日に癒し、決して翌日に持越さぬこと。
- 二五、熟睡安眠につとむること。

能

- 一六、其日の仕事は、其日に處理する事。
- 一七、明くる日の豫定は、必ず前日の夕に定め置くべきこと。
- 一八、一週、一月、一年の年中行事、週間豫定表等を造つて、規律的に生活する事。
- 一九、起床と同時に、仕事服を着すること。
- 二〇、作業中は雑談せず又喫煙せぬこと。
- 二一、上長の命には、従順に服すること。
- 二二、毎日(何十分以上、又は何頁つゞ)讀書すること。
- 二三、書物はよく選擇して、必ず精讀する事。
- 二四、日誌を記入する事。
- 二五、整理整頓。(物必ず定所にあり、定所に必ず物あること。)
- 二六、即時實行。(觀念即行爲にて、思ふと同時に實行すること。)



- 三、使用後、ペン・筆・農具類は洗滌して、定め場所に納め置くこと。
- 三、自分の力で出来ぬと思ふ事は引受けぬこと。
- 二四、要務先辨のこと。(他人を訪問しても、先づ要談より話すこと。)
- 二五、手紙の返事はすぐ出すこと。
- 二六、敢爲の精神を發揮して、先づ困難なる仕事に當ること。
- 二七、一日一文。(或は一日に詩歌俳句の類を、幾らかづゝ作ること。)
- 二八、家内的分業。(朝の仕事などを、家内手分けして、各人それづくに手早く行ふ事。)
- 二九、事務的精神を養ひ、事毎に能率増進を心掛くること。
- 三〇、一人一研究。(何事か自己に適する一事項に就き、毎日若干の研究をすること。)
- 三一、信用を増進するに努むること。
- 三二、改善録を備へて、改善事項の思ひつき及實施を記入すること。
- 三三、念々油断なく、常に準備のしてある事。

善

- 二四、常に注意深く何事をも觀察する事。
- 二五、毎日一度は、必ず渾身の努力を注ぐこと。
- 一、毎朝黙座澄心すること。
- 二、毎朝神佛に禮拜する事。
- 三、日に何回か念佛を絶やさぬこと。
- 四、毎日一回父母の許へ通信する事。
- 五、父母の心を安んじ喜ばしむること。
- 六、己の欲する所之を人に施し、己の欲せざる所之を人に施さぬこと。
- 七、一日一善。(事柄の何たるを問はず、如何に些細の善行にてもよき故、一日に一つは、必ず慈悲仁愛の行をする事。)
- 八、毎夕反省。



- 九、修養日誌をつけること。
- 一〇、己を責めて人を責めぬ事。
- 一一、己の善を言はず、他人の悪を言はぬ事。
- 一二、謙遜。
- 一三、温顔を以て人に接すること。
- 一四、汚穢醜行を避けて、聖潔純交を念とすべし。
- 一五、如何なる場合にも怒らぬこと。
- 一六、約束を違へぬこと。
- 一七、虚言せぬ事。
- 一八、毎日修養に關する書物を読む事。
- 一九、獨りを慎むこと。
- 二〇、汽車汽船の昇降其他あらゆる場合に、老幼を先にし、又之を助けること。

- 二一、毎夜感謝の念を捧げて就眠すること。
- 二二、食膳に向つては、禮拜して箸をとること。
- 二三、嫉妬羨望の念を起さぬこと。
- 二四、聞かれて困ることは言はず、見られて困ることは書かぬ事。
- 二五、名利の念を超越して仕をなす事。

富

- 一、豫算表を造つて、計畫的に生活する事。
- 二、毎月（又は毎日、毎半季等に）必ず一定の天引貯金をすること。
- 三、時間、金錢、精力の三者を浪費せぬ事。
- 四、病氣に罹らぬ様注意し、罹れば輕き中に直すこと。
- 五、金錢出入簿をつけること。
- 六、不要物は、たとひ安くとも買はぬ事。



- 七、無闇に交際を擴張せぬこと。
- 八、満を持して放たず、物にも心にも常に餘裕を存すること。
- 九、平素絹物を着用せぬこと。
- 一〇、頭髮を丸刈にすること。
- 一一、物品の破損は早く修繕する事。
- 一二、禁酒貯金、禁煙貯金をすること。
- 一三、副業貯金、内職貯金をすること。
- 一四、増俸貯金、健康貯金をすること。
- 一五、子弟教育貯金、嫁入貯金をすること。
- 一六、廢物利用貯金、節約貯金をすること。
- 一七、宴會には止むを得ざるものゝ外、可成出席せず、二次會は如何なるものも、斷じて出席せざること。

こと。

- 一八、笑ふ門には福來る、家庭の平和に心掛くること。
- 一九、借金をせぬこと。
- 二〇、簡易生活安價生活をなすこと。
- 二一、子供の勤勞に對しては一定の報酬を與へ、之を貯蓄せしむる事。
- 二二、家に大金を置かぬこと、身に大金をつけぬこと。
- 二三、流行を追はず、投機事業に手を出さぬこと。
- 二四、獨立獨行、決して依頼心を起さぬ事。
- 二五、毎日必らず消費以上の生産を心掛くること。



### 第九章 古今模範實行者十五例

神樂にかけし鑑の十五例

期する所は實行に在る。詮する所は實踐の効果を上ぐるにある。故に吾人は、諸君が我等の主張を實踐實行して下さる爲の便宜に供したい目的から、前章に於て、一事實行の百例を選んだが、更に本章では、古人五人、今人十人の、勇敢壯烈なる模範實行の實例を選掲して、讀者諸君の發奮を促さうとするのである。どうか此人達を手本とし鑑として、貴下の執らるゝ一事實行に猛進して下さい。たとへ其性格の異り、其境遇の同じからざるによつて、行ふ事柄は、是等のの人々と同一ではないにしても、此處に掲ぐる勇士等が、總べて善いと知つては勤めて行ひ、而も一度着手しては、徹頭徹尾、直進し勵行して、完成するまで、成就するまで決して、當初の決心を離さなかつた大意力は、儘に萬人の模範である。畏くも明治天皇の御製にも、「神樂にかけし鏡をかゞみにて、人も心を磨けどぞおもふ。」といふ御歌がある。次に掲ぐる十

五例は、即ち諸君が、神樂にかけし鏡と思ひなし、以て各自が熱心、眞面目、本氣、勇氣の、絶えざる發奮機となし賜らんことを希望する。

### □古人之部

#### (一) 一筆書寫行人

現今、筑前國宗像郡田島村の興聖寺に、一人一筆の大藏經なるものが、傳へられてゐるのである。元來此の大藏經は、同じ村の宗像神社に保存せられてゐたものであるが、明治維新の後、神佛分離の令が出づるに及んで、之を宗像神社より引離して、前記の興聖寺に移したものである。

そも、此大藏經と言ふものは、佛教教典のあらゆる種類が網羅してあつて、其浩澗なること實に驚くべく、唐版、宋版、高麗版等、版の相違によつて、多少其卷數を異に



してゐるが、何れも五千卷六千卷八千卷といふ龐大なもので、所謂汗牛充棟も嘗ならず一人で之を書寫するが如きは、常人の到底なし能はざる所である。嘗て傑僧傳教大師が叡山を開いて延曆寺を建立するや、是非共此大藏經を叡山に備へたいと志し、當時奈良の某寺にあつた大藏經を書寫せんと思ひ立つたけれ共、一人二人の力到底此大業を遂ぐべからざるを知り、願文を認めて衆人に乞ひ、僅かに一卷づゝでもよいから、廣く志ある人々の手助を願ひたいと天下に訴へ、かくて奈良七大寺の僧侶達を始め、多くの人々の援助を俟つて、漸く完成したといふ程のものである。

然るに筑前國にある此大藏經は、たゞ一人の努力によつて書寫せられたる、驚くべき信仰と精力との結晶物である。そもく此驚くべき信仰と精力との持主は唯であらう。之は今(大正十年)を去る七百三十餘年の昔、前記宗像神社の社僧であつた、色定法師と呼ぶ人である。姓は佐伯氏、父は矢張此神社の社僧で、母は藤原氏の出であると言はれてゐるのである。

扱此色定法師の書寫したる大藏經の原本は、唐版のものらしく、其卷数の五千〇四十八卷といふのが、唐版の卷數に符合してゐるのである。此法師嘗て、「法華四功德」なるものを讀んで、其中の一つに寫經の功德の有る事を知つてから、奮然として大藏經書寫の志を起し、大正十年を去る七百三十六年前、時は安徳天皇が長門の壇の浦で、悲惨の最後をお遂げになつてより後三年目、丁度色定法師が年二十九の、其四月より書き初めて、以後年を経ること四十二年の長き間、絶えて之を廢する事なく、御堀川天皇の安貞元年、鎌倉は源氏三代全く滅びて、京都から迎へられた征夷大將軍の頼經時代、享年七十にして漸く之を書き終つたのである。

今其大藏經の全部五千〇四十八卷を、滿四十二年を費して、平均に書き上げたものとして計算すれば、一ケ年約百二十二卷で、一ケ月約十二卷、十日にして四卷、三日にして約一卷を書寫しなければならず、而もそれが四十二年の永い間、寒暑風雨盆正月の區別なく、一日も休みなしに持續した割合となるのである。試に其四五卷をとつて全



卷の字数を計算するに、一卷の字数平均約四千五百字、即ち一日平均千六百五十字となる。之をば四十二年間、只一日の間断もなく連寫したことになるのである。而も字體嚴正、一點一畫を苟もせず、每卷皆謹慎下筆、見る人をして襟を正しうせしむるのである。殊に此四十二年の間、法師は一地に滞居してゐたのではなく、東西南北、諸所方々を旅したのであるが、旅中と雖も筆墨を捨てし事なく、小机を首より吊して、歩むにも休むにも、又宿にても之を書寫し、終始一貫、勇往邁進、遂に此偉業を獨力以て成就したのである。其勇猛心は、たゞく感歎の外ないのである。

人や其性弱く其志薄くして、多くは始あつて終なく、先は龍頭にして、末の蛇尾たるは世の常なるに不拘、珍らしや色定法師の精根、前後四十二年を貫いて、露ばかり倦むことを知らなかつたのである。今でこそ印刷の術が開けて、書寫の必要は無くなつたが今から七百幾十年の昔では、書寫の事業は單に自分一人のみならず、社會的に大なる功德をなしたのである。而して此色定法師の書寫したるものは、年を経るの久しき、或は

蟲に食はれ或は浸水に害はれて、多少の汚缺を生じたが、而も尙七百年後の今日、四千餘卷を興聖寺に残して、精力絶倫の遺訓を末長く我國民に物語つてゐるのである。

(附記) 一筆書寫行人の此事蹟は、全部筑紫史談第九集により承知したのであつて、其文の記者たる武谷水城氏、竝に該史談借覽の便を計られたる、福岡縣教育會の湯淺憲亮氏に、厚く謝意を表する次第である。

(一) 廣瀨淡窓先生の一萬善貫行

休道他郷多苦辛、  
同胞有友自相親。  
柴扉曉出霜如雪、  
君汲三泉流我拾薪。

之は廣瀨淡窓先生の、有名な詩の一つである。淡窓先生に詩は澤山ある。此先生は、豊後の國日田郷の學者で、其塾の「咸宜園」からは、澤山の人物が輩出してゐるのであ



る。我國でかなりの書物を読んだ人ならば、詩人として又教育家としての、淡窓先生を知らぬ人はないであらう。が然し、此淡窓先生が、一萬善實行の、隠れたる貫行者であつた事を知る者は、殆んどあるまい。吾人にとつて、頗る有り難い此一萬善實行の事は從來全く世間に知られてゐなかつたのであるが、近頃、福岡縣立圖書館長の伊東尾四郎氏が、淡窓先生の隠れたる美しき此逸事を委しく調べ上げられたのである。以下掲ぐる所の美談は、全く此伊東氏が苦心の恩恵によるものである。

今日に至るまで廣瀬家には、「萬善簿」と題する一冊子が残つてゐるのである。此冊子は、淡窓先生が安政六年の閏七月九日、氏が年五十四歳にして筆を起し、翌々安政八年氏が五十六歳の六月まで、滿二年の間になした一切の善事(功)及惡事(過)を、探點したるものである。氏は日々になしたる善惡を記號で記し、月末にはそれを差引勘定して、自己の行爲を反省する材料としたのである。今茲に其三四の月を、代表にとつて、簡単な表に作れば次の如くである。

計算年月	初めた時より の経過年月	功數	過數	差引功數	功數累計
安政六年三月の分	六ヶ月目の月	二	二	二四	三四八
安政七年六月の分	全一ケ年目の月	一八	一〇	一〇八	八六三
安政七年十二月の分	一ケ年六ヶ月目の月	七	八	四九	一三三九
安政八年六月の分	全二ケ年目の月	一三	三	一三〇	二二〇八

淡窓先生が、一萬善を積む計畫を立てられた事は、上に記した『萬善簿』の在る事でも明であるが、然しながら、果して此計畫を最後まで成し遂げられたかどうかは、從來全く不明になつてゐたのである。然るに伊東氏が、親しく廣瀬氏の宅を尋ねて、遍く蔵書記録類を探られた結果、其表紙には『萬善簿』とも何とも書いてないが、前記の『萬善簿』と同一性質のもの他に澤山有る事が分り、淡窓先生が單に上記の二ケ年に止らず、尙久しく此努力を繼續された事が、だん／＼分つて來たのである。之によつて今其積善概數を示せば、實に次の如くである。



年 月	年 齡	始めてよりの経過年月	功數累計
天保九年六月	七	三	三八九
同 十年六月	八	四	五〇〇
同 十一年六月	九	五	五三二
同 十二年六月	十	六	五八八
同 十三年六月	十一	七	六四三
同 十四年六月	十二	八	七〇三
弘化元年六月	十三	九	八〇九
同 二年十二月	十四	十	八五九
同 三年十二月	十五	十一年半	九三四
同 四年十二月	十六	十二年半	九〇三
嘉永元年正月	十七	十二月七ヶ月	一〇四三

即ち之によつて見れば、天保六年の閏七月、先生が五十四の年から、一萬善を積み始めて、嘉永元年の正月、氏が六十七歳に至るまで、年を経ること實に十二年七ヶ月に

して、遂に最初の目的たる、一萬善を積み上げられたのである。而して此後淡慮先生は老の其身に迫れるにも不拘、更に嘉永元年の二月から、再修して之を繼續されたやうである。

上記の功過の差引に於て、淡慮先生が如何なる事を「善」に數へ、又如何なることを「惡」に數へたかといふに、

- (一) 財を捨て、人を利す。
  - (二) 人に勧むるに善を以てす。
  - (三) 人に分つに食を以てす。
  - (四) 人の事を周旋す。
  - (五) 意を用ひて人を教ふ。
  - (六) 骨肉の間恩を用ふ。
  - (七) 念善。
  - (八) 乞ふ者に施す。
  - (九) 交際情を盡す。
  - (十) 生物を憐む。
- の如きを「善」行に數へ、又
- (一) 過食。
  - (二) 疾病。
  - (三) 怒心。
  - (四) 怒言。



(五) 殺生。

(六) 慳財。

(七) 猫を打つ。

(八) 蝨を捕ふ。

(九) 始を煮る。(十) 卵を潰す。

の類を、「悪」行に數へられてゐるのである。過食、貪食、間食などを、「悪」に數へられてゐる所より察すれば、氏は胃腸の弱いお方であつたのかと思はれる。又怒り易い性癖が有つたものと見えて、怒を抑へることに、多大の努力を拂つて居られた様である。怒にも大小あつて、或忿怒は悪の二點、或ものは悪の三點、甚だしきは悪の五點に數へられたる怒もある。

扱顧みて、淡憲先生が此一萬善を積まんと志された、心の起りが何時頃であつたかと調べてみると、早く既に十八歳の頃より、斯様な事をしたといふ、志だけは有つた様である。然しながら何人にもある如く、志は有つても實行は容易に出來ず、四十三の年には、「自新録」なるものを作つて、以て自ら自己を反省し訓戒せられたのであつたが尙先生の満足せらるゝには、至らなかつたのである。そこで年五十四の時、「再新録」な

るものを記すと共に、愈々前記の「萬善簿」を作つて積善の實行に當り、年の頽齡に近づくをも厭はれず、益々勇奮して、爾後十二年七ヶ月を費して、遂に芽出度少年時よりの志を果し、更に此一萬善完成の後は尙企を新にして、矢張り自修自省の實行に努められたのである。詩人として又教育家として有名なる淡憲先生に、斯る逸事の有つた事を知つては、更に景仰の念を加へざるを得ぬのである。吾人は此淡憲先生の隠れたる善行を調査して、之を吾人に提供して下さつた伊東氏の勞を深謝すると共に、お互に、深く我身に振り返つて、淡憲先生の老いて益々修養に勉められた、模範に倣ひたいものである。

(三) 瀧鶴臺先生の妻

男子の事例を、上に二つ掲げたので、今回は女性の模範を示さうと思ふ。學者として有名な、徳川時代の儒者瀧鶴臺先生の妻は、元來色黒く顔醜くして、其容姿は甚だ振は



ぬ方であつた。否、振はぬといふよりは、寧ろ醜い方にあまり甚だしく振ひ過ぎてゐたが爲に、十八、二十、二十五と年は取つても、一向縁談の申込は無かつた。両親は頗る之を苦に病んでゐられたが、本人は案外平氣なもので、貰ひ手の無いのを、心配してゐるらしい様子もない。いやそれ處か、此娘常に人に語つて、「同じ持つなら、瀧鶴臺先生の様な人を夫に持ちたいものである。」と言つてゐた。當時鶴臺先生は、學徳共に高くして名聲既に噴々たるものであつたから、かゝる希望はまるで土龍の天に昇るを希ふ様なものだ、多くの人に笑はれてゐたのである。然るに流石は學者だけあつて、鶴臺先生大に此言に見る所あり、「這は我が知己である。屹とよく家を治め我を助けて呉れるであらう。」といつて、遂に其女性を娶つて一生の伴侶にしたのである。

女性瀧氏に嫁いでからは、日夜心を盡して先生を助けた。然るに數年経つた或日、仕事折節、フト袂の中から赤絲の手毬を、コロコロと板敷の上に取り落した。先生之を見て、「それは何」かと問ふた。女性、平生は隠してゐたが今はせん方なく、黒い顔を赤ら

めて言はるゝには、妾は天性愚かにして、とかく物事に過が多いので、ごうか其過を少くしたいと思ひ、いろ／＼に工夫いたしました結果、かく赤白兩方の絲と毬とを袂の中に入れて、悪い心悪い行ひの有つた時は赤絲、善い心善い行ひの有つた時は白絲を、毬に巻き足すことに致しました。始め一二年の間は、赤絲の毬ばかりが大きくなりましたが、これではならぬと自ら省み自ら慎みしましたので、唯今は漸う此兩方が同じ程の大きさになりました。之と申すも偏に良人の善行に化せられたお蔭です。さりながら尙白い方の毬が、赤い方の毬よりも大きくならぬのが、お羞かしう御座います云々。」

鶴臺先生之を聞いて、其やさしき心と女らしき仕方とに、いたく感動し且喜ばれたのである。凡そ人の缺點として、善い事はすぐ之を他の人々に吹聴し、而して吹聴するが早いか、或は中止し或は頓座しやすいものであるが、鶴臺氏の妻女は、全く之と反對であつた。此妻女の行を、前に述べたる廣瀨淡窓先生の「一萬善」と思ひ合せば、實に男女好一對の、積善貫行美談である。



(四) 馬琴の八犬傳及マルクスの資本論。

我國徳川時代の文學者として、瀧澤馬琴の名を知らぬ人は殆ど無からう。著す所の小説草紙類併せて二百五十餘種、中にも有名なものが八犬傳で、文化十一年に筆を起して天保十二年の完成に至るまで、前後時を費すこと二十八年の久しきに及んでゐる。此間馬琴には種々の辛苦があつた。嗣子の興繼は早く死ぬし、自分は七十餘の老齡に達し、剩へ眼の病に罹つて、一切讀む事も書く事も出來ず、仕方なく興繼の婦をして、自分の口で言ふ所を、彼女に筆記せしめたのである。然しながら何分にも多くの字をしらぬ封建時代の婦人の事として、思ふ様に筆記する事が出來ない。それで馬琴は一字一畫其書き様を教へつゝ、遂に此大著を完成したのである。

西洋と日本、文學書と經濟學書の差はあるが、マルクスの資本論も、八犬傳に劣らぬ苦心の傑作である。現今經濟學上で、聖書と言はれてゐる書が二つある。一は英人ア

ダム・スミスの著した「諸國民の富」といふもので、他は此處に述べんとする獨人カール・マルクスの著した「資本論」である。マルクスは何人も知る如く、社會主義の元祖とも言はるべき人であつたが爲に、獨逸人には居られず、一八四三年、彼が二十五歳の時、彼は其祖國を追はれ、新婚の愛妻と相携へて、佛國巴里に落ち延びたのである。之れ彼が國家よりの追放を食つた食ひ始めであつて、居ること二年、再び佛國宰相ギゾーの爲に追はれて、白義耳のブルユツセルに移り、居ること三年、又白義政府の爲に追はれて巴里に歸り、居ること二ヶ月、一旦獨逸に歸つたが、又追はれて巴里に戻り、居ること一ヶ月再び退居の命を受け、大陸の天地身を容るゝの所なく、一八四九年の六月、終に英京倫敦に落ちのびたのである。扱て恒産無き身の、かく諸國を流浪しては、聽て貧困に陥るも自然の成行である。英京に於けるマルクスの生活は、實に憫むべき状態であつた。而も此憫むべき状態の中に、彼は自己の經濟學上の意見を著述せんと志し、こゝで「經濟學批判」といふ書を書き初めたのである。之が後に有名な「資



本論」となつたもの、前身である。「経済學批判」は、一八五二年腹案を作つてから、八年目の一八五九年に至つて、漸く出版せられたのである。此間マルクスは非常な大病に襲はれたのである。そして此大病も、一つには生活困難の爲に營養不良に陥つたのと、尙一つには晝は讀書研究に耽り、夜は筆を執つて屢々夜明に至る迄も止めなかつたので精神の過勞を來した結果であるらしいのである。然しながら此困苦は、まだ彼にとつては入口であつた。此「経済學批判」といふ書は、それから後七ケ年の刻苦勉勵を経て、資本論の第一巻となつたのであるが、此「経済學批判」を稿を改めて、之を「資本論」の第一巻とする爲に、彼の費した七ケ年の生活は、實に慘憺たるものであつた。一八六〇年には、彼の妻は重患に罹り、彼は一ヶ月以上も徹夜をして看護して、而してかゝる事柄の爲に、彼の貧窮は一層甚だしく、やむなく三割五割といふ様な高利貸の金を貸りて、當座を凌がねばならなかつた。かて、加へて、彼自身も亦病になり、翌くる年には彼が唯一の収入の道であつた、紐育新聞の通信員たることをも謝絶せられ、一八六五年

頃の日記にも、一日十八時間宛の勞働に服してゐたと書いてあり、そんな事で屢々病氣にも罹つたのであるが、此間一日も其努力を止むることなくして、前後七年間を費し、(経済學批判の腹案を造つた時より數ふれば、前後十五年の精勵辛苦をなして)一八六七年の一月に、漸く「資本論」第一巻の原稿を、清書してしまつたのである。「経済學批判」の稿を改めて、之を「資本論」第一巻とする爲に、マルクスの費した七ケ年の生活は、上に述ぶるが如く實に慘憺たるものであつたが、それより後、「資本論」の第二巻及び第三巻を起草する爲、彼の費した殘生の十六年は、尙一層悲惨なるものであつた。此間彼は殆んど病苦に見舞はれ通しであり、貧困は到底筆紙のよく盡す所に非ず、且つ前後三十八年間、終始善良なる友として、一身を彼に捧げた愛妻に死に別れたのである。夫人を喪ふて後のマルクスは、其悲を忘れんが爲に、資本論の執筆に専念したが、病の爲に思ふ様にならず、何とかして、其残り少き生命の有る中に、此資本論を書き上げたいと祈つたのであるが、天彼に許すに餘命を以てせず、一八八三年三月十四



日、愛妻エンニーと別れて後十五ヶ月餘にして、彼も亦永遠の沈黙に入つたのである。マルクスの死んだ後、「資本論」第二巻及び第三巻の未定稿は、マルクスの心友エンゲルスが、前後十一年を費して之を整理し、初め二ケ年を経て先づ第二巻を公にし、更に九ケ年を費して、漸く其第三巻を完成し得たのである。資本論全三巻が、人の血を吸ふことそれ斯の如く大である。顧みて、一八五二年にマルクスが初めて資本論の腹案を造つてより、彼の死後エンゲルスが、其遺稿の全部を整理した、一八九四年迄を數ふれば、之れ實に四十有二年の長きに亙る一事貫行である。同一問題を把捉して、眞に力を注ぐことそれ斯の如くなれば、如何に平凡人のなす所と雖も、必ずや相當の成功を齎すであらう。況んやマルクスの如き天才の成す所に於ておやである。

マルクスは社會主義者である。吾人は彼の社會主義に對しては、決して全幅の同意を表する者ではないのである。が、而も尙心友エンゲルスと共に、前後四十二年の長年月を費して、専心一意資本論の完成に努力した氣力と忍耐とに對しては、實に滿腔の敬意

を表せざるを得ぬのである。殊に此資本論の出版にまつはる美しき物語は、友人エンゲルスが、マルクスの死後十一年の長年月を之に捧げて、故人の志を遂げさせた事である。我國では楠公父子の如く、親子數代相繼いで、一貫して忠義孝行に身を捧げた人があり、西洋では親子二代三代が、相ついで同一發明に腐心し、若くは、此マルクスとエンゲルスとの如く、友人相ついで一つの事業を完成した例は、尙他にも少くない。一事貫行も茲に到つては、實に一個の人間以上の力である。

馬琴といひマルクスといひ、其他盲目の天才塙保巳一が群書類従の著述、本居宜長が古事記傳の著述の如き、何れも皆常人以上の大なる事業は、必ず常人以上の大なる努力の繼續を根底としてゐるのである。如何に天性非凡の才學ある者と雖、若し此馬琴の如く又マルクスの如き、終始一貫死して後已むの大意志なくば、あだかも虹の珍しきが如く花の美しきが如くにして、單なる一時の榮に終るのである。何といつても大成の第一要素は、「徹底」する迄の「意力」である。



(五) 悔悟の念力禪海和尚

頼山陽先生の名文で名高い、豊前國耶馬溪の、羅漢寺に至る途中に、巍峨たる大盤石を切り開いた、一つの大きな洞門がある。昔此洞門の切り開かれる迄、道は山國川の岸に聳ゆる此大盤石の外面を繞つたもので、或は「鎖の渡」とか、或は「親知らず」の嶮とか稱せられ、此危い道を踏み外して、通行人の一命を失ふ者、毎年必ず十人以上を出したのである。

東山天皇の貞享年間、越後の國高田の藩士、福原勘太夫と呼ぶ人の子に、市九郎といふ無頼漢があつた。早く家を飛び出して江戸に移り、東京は淺草區田原町の、中川三郎兵衛といふ旗本の家に住み込んでゐたが、どうも主人の妾と情を通じて、中川三郎兵衛を斬り殺し、妾のお弓と手を携へて木曾路に來り、今の中央線蕨原驛の附近で、晝は峠の茶店を開き、夜は強盜追劔を働いて、數年の渡世をしてゐたのである。

然し乍ら人性も善、殊に市九郎には武士の血も通ふてゐたので、或若い夫婦の旅人を殺したのが悪事の仕納めで、豁然悔悟し、お弓を残して木曾路を下り、美濃に出て大垣の願淨寺に救はれ、こゝで佛門に入つて、懺悔滅罪の淨い生活に入つたのである。禪海といふのは、其時以後の名前である。

約一年ばかり大垣に居た後、禪海は出で、諸國遍歴の旅に上り、京より山陽道を経て九州に渡つたが、縁乎命乎またく前記「鎖の渡」附近に於て、川に落ちて死んだ馬方の水葬に出遭ひ、仔細を尋ねれば「鎖の渡」は天下の難所で、かくして人の死ぬことは別段珍しくもないこの事に、兎も角も行つてみやうと、道を尋ねて其場に到れば、これは又聞きしに勝る嶮難の地で、成程多くの人々が、落ちて死ぬるも無理ない事と思はれたのである。

此一刹那禪海和尚の胸に、一つの願が起つたのである。それはどうかして、自分の力で此大盤石を切り開いて、道の難所をトンネルにし、以て過去に犯した自己の大罪の償ひ



にしたいといふのである。之れ時は享保十九年、禪海が四十九の歳であると言ひ傳へられてゐる。

それより後禪海は、出ては托鉢して食を乞ひ、入つては獨力鑿を振つて此巨巖大石と戦ひ、一年三百六十五日、雨が降らうが風が吹かうが、唯一人此巖洞中に起臥して、一寸又一寸、一尺又一尺、念々刻々之を切り開く事に努めたのである。

かくて二十一年といふ長い年月が過ぎた。そして此二十一年一事貫行の大偉力は、高さ二丈幅三丈、長さ三町に亘る大洞門を開鑿し、今に至るまで二百年、毎日通る男女に、其鴻業を驚嘆せしめてゐるのである。

禪海和尚が此大事業に取り懸らんとするや、始めは一笑に附せられ、或は何かの山師ではないかとも疑はれたのである。扱ひよく之に取り懸つたが、最初の一年で約一丈、四年掛つて漸く五丈あまりを掘つた頃には、未だ世人の嘲笑は去らなかつた。然るに拮据勉勵倦む事なく、笑はれても嘲られても相手にせず、九年たつて漸く二十二間を掘り抜

いた頃から、そろ／＼世人の同情を集め得るに至つたのである。其より後、幾人かの人々は、幾度か助けに来て呉れたが、又幾度となく飽きはてゝは歸つてしまふ。たゞ此間にあつて、始終一貫他人が居つても居らなくても、自己の全力を捧げて、倦まざるものは禪海和尚其人であつた。

然るに、こゝに一つ珍らしい物語がある。それは此禪海和尚の熱誠によつて、長さ三町に亘る大盤石も、あと暫くで開けやうかと思はるゝ頃になつて、嘗て江戸で斬り殺された中川三郎兵衛の一子實之助が、敵討ちに来たことである。父の殺された時、此實之助はまだ三歳であつたが、九つの折父が非業の死を遂げた事を聞いてからは、ごうかして親の敵を打ち取りたいと志し、それより大和に行つて、柳生流の劍術を學び、十九の年より諸所方々を捜し廻つて、漸くこゝに今の禪海和尚、昔の福原市九郎を嗅ぎ出したのである。

然し悔悟の後の禪海は、實之助が想像して來たやうな、憎々しい人でもなく、又荒く



れた男でもなかつた。既に十九年を岩穴の中に暮して、腰は屈んで延びず、眼は朦朧として曇り、狂人や乞食にも劣る程の、見るも憐れな、痛々しい姿である。加之此老僧、既に二十年の昔に於て、當然死んで居るべき筈の命と覺悟をしてゐるから、少しも惡びれた様子はない。「實之助さんとやら、遠い所をようこそ遙々と尋ねて来て下さつた。俺は早うから、此皺首をあなたに差上りたいと待つてゐたのです。主人の中川三郎兵衛さんを、殺した市九郎は私に相違はないのだ。サア早うどうか敵をお打ち下さいませ。」斯う言はれると、實之助の張り切つた心も幾分か弛んで來た。然し之が我父を斬り殺した當の男であるかと思ふと、一打に斬つてしまひたい心持もした。が、此時三十人近くの石工が、此近郷から雇はれて、禪海和尚の仕事を助けに來てゐたが、此石工共が遮つた。「實之助様とやら、親の敵におあひなされて、嘸打ち取りたうはございませう。然し此和尚さんに、昔ごんな事が有つたかは知らないが、今日は生神様とも生佛様とも、譬へ様のない有り難いお方です。此二十年の間、たゞ一日の休みもなく、世人の爲に此

鑿道を切り開いて、今は其爲に膝は延びず、目は見えず、髪は此通り延次第、身は此通り垢だらけ、それをも厭はず日に夜をついで働いてゐられるので、ごうやら長さ三町の此鑿道も、成功ま近うなりました。何時迄とも申しませんが、ごうか此洞門の通じるまで、勘辨して上げて下さいませ。今も此和尚さんの言はれる通り、すでに亡き身と覺悟しての事だから、逃げも隠れもせられはせぬ。私共一同の願でございませう、ごうか此洞門の開けるまで、敵打つことお待ちなされて下さいませ。」と、石工三十人が手をつかへて頼むので、實之助も仕方なく、ごうか成功の日を待つて、敵をどる事にしたのである。其後實之助は、工事の峻功を早める爲、自分も石工に混つて働く様になつた。扨朝夕同じ洞穴で鑿を振ひ、且暮に一つ鍋の飯を食つて暮してみると、昔は兎もあれ、今は親切温情溢るゝ計りにして、之が昔人を殺した惡黨とは思はれぬ解脱の仕方。實になつかしく又痛はしい好々爺で、迎も之を殺す心にはなれなかつたのである。

實之助が禪海和尚にあふてから、丁度一年半後の或夜、禪海和尚が口にお經を稱へつ



、常の如く打ち振つた一撃で、とうとう工事が成功した。禪海和尚は直ちに實之助を呼びよせて、『永年の佛恩報謝の大業も芽出度すんだから、今日こそは此賊首をはねて、汝の父の亡靈に回向をしてくれ。お蔭で汝の助力によつて、工事も早く出来上り、平生の素願もここに達したれば、思ひおく事は更にない。さあ早く早く』と、頭さしのべ氣を静めて、瞑目合掌したのである。けれ共かうなつては、鬼ならぬ身の逆も敵をとる心も起らない。實之助は、『今更どうして、刀を善人に加へる事が出来ませうか。』と云つて、立ち上らうともしないのである。禪海聲を勵まして、『よし、汝臆して敵の首を取る事が出来なければ、我自ら首をはねて、汝に進せるであらう。』と云つて、猛然として刀を奪うて自害せんとした。すると其子は立つて之を押し止め、すぐ刀をあげて自分の髻を切り放ち、禪海の足下に伏して、『我今日より君の御弟子となつて佛門に入り、永く父の菩提を弔ふであらう。どうか弟子入りの儀、お許しを下さいます。』とたのみ、感極つてここに兩人相抱いて、父子の如くに泣き合つたといふ。人は一代名は末代、悔悟

の後の念力に、岩切り通し、剩へ敵の子までも佛道に入れた禪海和尚の大意志こそ、正に我等の事を成すに學ぶべき龜鑑である。

□ 今人之部

(一) 木下中佐の洋燈掃除。

駿州沼津の附近に、「香貫」といふ所があり、此處に木下中佐と言つて、沙河の會戦で片脚を無くされた、大隈侯と同じ隻脚の方が居られる。私共は平生から此中佐とお心安く交際を願つてゐるが、非常に謹嚴質朴な、そして又温情溢るゝ計りのお方である。名譽の負傷によつて軍隊を退かれた後も、何か身に叶ふ事に於て祖國の爲に盡したいとの御熱心で、田舎に這入つて少年團を組織されたのである。恐らく之が日本で、一番



最初の少年團であらうかと思ふ。今は衆望を擔ふて、この村の村長になつて居られるが、此木下中佐が嘗て一事貫行の話を聞き下さつて、善は急げの方針で、直ぐ之を採用せられたのである。扱中佐は何を貫行せられたかと言ふと、其頃はまだ電燈がなく、香貫村は洋燈で事を辨じてゐた時であつたから、家庭の中で一番人の厭がる洋燈掃除を、一日缺かず中佐自らされる事になつたのである。すると之を見られた奥様も黙つては居られない。不自由なる夫が洋燈掃除をして下さるならば、自分も何かやらなければならぬといふので、熟考の結果、平生夫の中佐が唱へて居られる事柄、即ち毎晩寝る前には、總ての物を一定の位置に整へて置くといふ、軍隊式の整頓法を御實行されることになつたのである。すると又六つになる坊ちゃんか、お父さんもお母さんも一事貫行をされるなら、坊も何かしたいと言ふ。然し六つの子で毎日出来る様な事は、一寸容易に見つからないが、遂に、それなら坊は毎晩寝る時に、日曆を剝いて寝ることに定めやうといふので、木下家は家内揃つて、一事貫行の行者となられたのである。尙中佐は、矢張り此一事貫

行主義でもつて、禁酒をも斷行せられたのである。若し誰か香貫村の木下中佐の家を訪問するならば、先づ其門口に、「自今禁酒」と書かれた木の札が、打ちつけてあることを發見するであらう。之れぞ即ち沙河の勇將貫行の猛者たる木下中佐が、「即時實行」の記念物である。

古語に、「徳孤ならず必ず隣あり。」と言ふ如く、木下中佐一家の御美德は、程なく家門を出で、香貫村の青年に及び、或は自分の家の近くの道路を掃くとか、お宮お寺の境内を掃除するとかして、村は之が爲に著しく整頓する様になつたのである。老子曰く、「上士は道を聞けば努めて之を行ひ、中士は道を聞けば存するが如く亡するが如く、下士は道を聞けば大に之を笑ふ。」と。木下中佐の如きは、實に老子の謂ふ上士たるお方である。

(一) 影山氏怒癡を匡正す。



同じく駿河は、三國一の名山で聞えた富士郡に、影山茂樹といふ方がある。此人は影山秀樹と言つて、静岡新報社の社長にもなられ、又嘗て代議士でもあつた方の息子さんで、洋行もされた程の立派な人であるが、人には兎角何かの癖のあるもので、誠に好人物でありながら、非常に怒り易い性質の人であり、何事かムツとすると、誰彼の區別なくすぐ鐵拳を振り上げるといふ流儀に近い方であつた。然るに此怒りん坊である同氏が、我等の主張する一事貫行主義に觸れてより、「爾今決して怒るまい。」との大決心をせられたのである。影山氏にとつて、憤怒は最大の缺點最大の弱點であつた。が最大の缺點であり弱點であつただけに、此を撓め直すにも、頗る骨が折れたのである。愈々明日からは怒るまいと決めた日の翌朝、目がさめると、もう何だかムシヤクシヤする様な氣がした。それでも氏は下腹に力を入れ、ウンと堪へて、こみ上げて来る怒氣を押へつけた。漸くにして七時を過ぎ、八時を過ぎ、九時を過ぎ、臆て十時になつた。それ迄は無事であつたが、十時になつて、とうとう氏は辛抱し切れずに怒り出してしま

つたのである。さあ何たる不名譽ぞ、貫行表には最初の日から黒圈がついたのである。氏は怒つてしまつた後で、尠からず後悔をし煩問をした。のみならず到底續きさうにもないといふ寂しさも心の中に起つて來た。けれ共之でもつて絶望すべく、氏の意志は強すぎた。向上の一念は尙氏の胸中に燃えて、勇奮一番、最初の日此失敗を、永久の成功の基にすべく考へ直さした。氏熟々思ふに、私が怒り易いといふのは、永年の癖であるから、さうく一朝一夕に改まらぬも無理ではない。と言つて直さずに置けば、いつ迄経つても同じことだ。併し今日は幸にして、十時迄は怒らなかつたのだから、是から毎朝十時迄は、何があつても怒らぬことにしよう。之より氏は、十時以後は、遮莫、「十時以前には決して憤怒すべからず。」といふ、一事貫行に改めたのである。然るに此貫行事項は、氏の強大なる勇氣によつて繼續された。たとへ十時以前に腹の立つ事があつても、十時以後に延ばしておく。然るに妙なもので、延ばしておくとい時の腹立ちが静まつて、マア／＼怒るまいと言ふ事になる。貫行表には白圈ばかりが附くことにな



つた。かくて幾十日間か、午前十時迄の貫行に成功した影山氏は、更に十二時迄に延し夕食迄に延長し、最後には一日中晝も夜も、全く一時的の憤怒を發せぬ様になつて、親しみ易い本然の美質を、愈々完全に發揮されることになつたのである。

怒は暫時の狂氣である。怒の焰は他を焼き又自らをも焼かねば措かぬ。怒の最後の瞬間は、やがて後悔の最初の瞬間である。一時の憤怒で身を誤り、寵を失ひ、友と別れ、損失を招いた例は、幾らあるとも數知れぬのである。宏量、平靜、寛仁、大度の必要なきことは、幾人の聖人君子によつて、説かれてゐることも知れぬのである。然れ共世には尙怒り易い人が頗る多く、又女性的の人は、表立つては怒らずとも、内竊に嫉妬怨恨の情を含むのが少くない。どうか此人等は、前記影山氏の好模範に倣ふて、たとへ一時に撓め直す事の出來なくとも、漸を追ふて、最後の完成にまで、奮闘貫徹せられんことを希望するのである。

### (三) 田村武治翁の辻説法。

富士山を目の前にした絶景と、明治の文豪高山樗牛が永眠の地とを以て有名な、静岡縣龍華寺の畔に、田村武治氏の邸宅がある。氏は少壯米國に學び、後東都の實業界に活躍して、廣く其名を知られた紳士であるが、今は前記龍華寺畔の風光を愛し、一家を擧げて其の地の住民となられたのである。所が氏の住んで居らるゝ不二見村の妙音寺部落は、風景の美なるに似ず、風俗の善くない所の様である。が氏は自ら農民の友となり、餘生を地方の改善に捧げて、倦まず撓まず、經濟と道徳との向上を圖つてゐられるのである。其熱誠苦心眞に感すべきの至である。氏が特志家として、指導し經營して居られる事業はいろいろ有るが、特に私共が茲に記さんとするのは、翁が毎朝小學校の兒童に向つて、鐵州寺の門前で、辻説法をおやりになる事である。翁の信念によれば、單に戸主や青年の人々に對しての、指導ばかりでは十分ではない。之と共に無邪氣な子供の心中



に、善を愛し公に盡すの美風を植えつけねばならぬ。茲に於て氏は大正六年の六月より、恰度そこが家から學校への道の曲り角になつてゐるので、毎朝鐵州寺の門前に出かけて學校行の子供を集め、十分計りお伽噺やイソツブのお話をせられるのである。翁が宅に居らるゝ日は、一日も之を缺かされる事がなく、翁の不在若しくは病氣等で行く事のできない日には、奥様が代理をして話され、且つ子供の服装などを正してやつて、「サア元氣よく行つていらつしやい。」と勵まされるのである。箱根の連山が白く雪を載いて、富士嵐が身を切る様に吹き下す冬の朝などに、かじかんだ子供の注意力を集めて、話を呑み込ませるは容易の事ではないが、翁は寒暑を論せず、定まつた時間にこゝへ出て、辻説法をせられるのである。氏は必ずしも自己修養の根底たる一事貫行の觀念から、之を遣つて居られるのではないかも知れないが、禪の修養にも深いお方であるから、何事でもなさる事が、すべて徹底してゐるのである。

#### (四) 日本一の孝女高原ハルノ。

「國亂れて忠臣顯れ、家貧しうして孝子出づ。」といふ古言の如く、徳島縣板野郡松坂村の孝女高原ハルノは、赤貧洗ふが如き家に生れ、幼にして母の病に侍し、後又母の病に加ふるに父の病を看、晝夜衣帯をも解かず、奉養看護すること二十年、全く一日の如くであつた。今や齡既に三十を過ぐるも、未だ曾て新截の衣を纏はず、美味の食に飽かず、全身其爲に不具となつても、露ばかり悲しむ様子もない。眞に之が稀世の孝女といふものである。

大正三年の春、東京の「實業之日本社」發行の「婦人世界」が主催となつて、全國より孝女節婦の推薦を求めたことがある。時に各郡市町村長等の推薦をうけて、集るもの實に四千二百六十五、之を顧問たる鳩山春子、嘉悦孝子、棚橋絢子、山脇房子、跡見花蹊、三輪田眞佐子、下田歌子等が審査して、其結果を同三年十月の、表彰號に發表し



たのである。此時優等賞を受けたるもの百名、特別賞を受けたるもの三名、而して其特別賞中の第一位を占めたものは、此處に吾人の語らんとする、高原ハルノ子其人である。後其審査の模様をきくに、顧問の人々は孰れも皆高原ハルノ子の調書をよみ始むるや、落涙禁じがたく、一人の例外もなく之を特別賞に選抜して、敢て他と比較するの必要を見なかつたといふ事である。

ハルノ子は明治十八年六月の生れで、表彰された大正三年は年三十、今年大正十年は年三十七である。同女は六歳の幼時より病母の看護に身を委ね、未だ嘗て一日も學校に入學した事は無く、年は婚期を過ぐれども、嫁入しやうとする心も無い。今日迄永の年月家に在つて、日夜母に附添ひ、寝るにも母を抱いて、同じ方を向いてのみ臥床したからして、半身は筋肉の發達を缺き、手足には瘤を生じ、顔の左右亦幾分其形を異にしてゐるのである。

斯くも可憐なる孝女の越し方を見るに、母は九人目の末子ハルノを生んで後三年目より血の道に罹つて、今日七十以上の年になるまで身動きがならず、父は途中に死し、兄弟も或は死し或は他にゆき、今は病身にして目の不自由なるハルノ子の兄を加へて、一家三人暮しである。ハルノ子は六歳の時より此母の病を看護した。始めの中は病氣も比較的輕かつたが、ハルノ子十二歳の頃よりは、足も腰も立たずなり、始終眩暈がし、晝に二度夜に三度位は差込があり、其時は咳嗽は烈しく動悸は盛んに、手足は痙攣を起して、恰も瀕死の状態にあるが如き苦悶が、約一時間ばかりも續くのである。ハルノは常に母の側面より、脚部を病床の中へ差し込んで、母の兩足を自分の股間に挟み、以て下肢の冷ゆるを温め、又蒲團の上からは、母の膝頭に當る所へ觸りのよい様に我顔の右半面を控えて、右の手は母の胸部を抑へつけて、動悸を防いでゐるのである。然るにいざ差込となればそれにも力足らず、更に自分の股の邊に挽臼を置いて、之を以て動悸より發する、振動を防ぐ爲の重鎮としたのである。かゝる病狀はハルノ十二歳の時より今日まで續いてゐるのである。



此間に父は重い病に罹る。自分の家がないのでむさくるしい借家に住んでゐたが、度々家主からは謝られる。若し其間の出来事を詳細に物語るならば、鬼神も爲に慟哭するであらうと思はれる程である。今は到底之を詳しく述べるの餘白もないが、ハルノ生れてこの方、女の欲しがる新調の衣服を身につけた事もなく、芝居見物は、愚か紅白粉は無論のこと、神参りにさへも、一回も行つた事がないのである。而も前にもいふ如く、顔も身體も左右其發達を異にするの不具となるも、つゆ聊かも之を悔むの色がないのである。至孝一貫、孝子も世間に多いのであるが、かくまでに全く一身を犠牲に供して、父母の病をいたはつた者は、多くはない。眞に日本一の孝子であり、近世一事實行の好模範である。

### (五) 志波六郎助翁の法螺貝。

大正十年六月十日、昔天智天皇が初めて漏刻を用ひて、「時」の制を布かれた記念日に

「時」の功勞者として、内務省より表彰せられた方の中に、志波六郎助といふ七十四の老人がある。翁は佐賀縣神崎郡脊振村の人で、翁が早起宣傳の法螺貝は、明治三十二年から始つて、連綿として尙今日に續いて居るのである。翁は早くから伊勢參宮の歸りに買つて來た法螺貝を、村の公役などの時には吹き立て、「サア皆今から仕事にとり懸るぞ」と相圖したものである。が、或日翁は考へた。「村を富ますには何よりも時が大事だ。一時間でも餘計に働かねば村は富まず、それにはもつと早起をせなければ駄目だ」と思ふと共に翁は村の公役に吹き鳴らした例の法螺貝を携へて、明治卅二年の或朝の未明に、村の中央にある確然山の巔から、之を吹き立てたのである。此時村の人達は、「ありやたしか六郎助さんの法螺貝に違ひないか、でも今時分一體何のこツちやろ」と、怪しみながら寢不足の眼を擦り、起きて來たのである。之より後は雨の朝雪の朝も厭ひなく、午前四時には確然山の頂上から、「ブーブーブーブ」と吹き立て、朝寢に馴れた村の人々の惰眠をさましたのである。それのみならず此志波翁は、暇さへあれば村中を



驅け廻つて、朝起の宣傳をするので、「お前が起さんでも、起きたい時には起きる。」と、不平を言ふ人も少くはなかつた。がそれにも構はず、翁は此貝を吹き續けたのである。後には其貝が小さいといふので、村の或法師から大きいのを譲り受けて、一層強く吹き立てたのである。こうした日の續く内に、流石朝寝坊の村民も翁の熱心に感動して、だん／＼不平を言ふ者も少くなり、法螺貝が鳴り出すと、ソラ鳴つたぞと言つて、枕元のマツチを擦り、行燈や洋燈に火をつけて、「ハイ起きました。」と合圖をする様になつた。翁は此外私財を投じて、桑苗を買つては人々に配付したり、製茶事業澱粉事業の奨励改良に従事したり、村の植林事業の世話を焼いたりして、一身一家を忘れて公共の爲に盡力してゐられるのである。されば村民も、いつか翁の事を志波六郎助とは言はずして、「世話御苦勞助」と呼ぶ様になつた。かくて脊振村は全國有数の模範村として、内務省から表彰せらるゝ様にもなり、翁は又大正四年に農事功勞者として、大日本農會總裁有栖川宮殿下から、有功章を授けらるゝに至つたのである。翁の述懐に曰く、

確然に登りし時は四時なるに、法螺ふくうち朝日輝く。

法螺吹いて荒野を拓き桑植ゑて、錦の里となすを樂しむ。

神代より早起きをして身を清め、朝日を拜む日の本の國。

明治三十二年から數ふれば、最早二十年以上になる。此長い間一日も休まず確然山に登つて、「早起」と「勤勞」との叫びをあげ、根氣よく村民の因襲打破に従ふてゐる、七十四の老翁志波氏の勇氣は、正に我等が一事貫行の好模範ではないか。

(六) 上地直永氏の冷水浴。

上地直永氏は、鳥取縣立高等女學校の先生である。沈勇熱烈、謹直方正、神に對する敬虔と人に對する愛情とを併せ、實に近代稀に見る良先生で、嘗て伏見宮殿下からも、其熱誠に對して御褒辭を下された程のお方である。同氏の一事貫行は冷水浴で、明治二十七年の四月一日から今日迄、一日缺かさず續けて來られたのである。随分世間では、冷



水浴の機能を述べ立てる人も少くないが、之だけの長年月の體驗を持つて主張し得る人は、多くはあるまい。又中には冷水浴は體育として、完全なものでないといふ理由から、之を非難する人も時々あるが、其人等にしても、かゝる長年月の經驗を根據として、論じ得る人は殆んど無い。随つて其主張には力がなく權威がない。我上地君の如きが言ふ所は、單に机上の空論や、薄つべらな研究ではなくて、言々すべて三十年の體驗より得來つた、最大の權威である。

氏は學生時代より、忠孝の根本は身體の強健にありと確信し、細心の注意と超凡の努力とを拂つて、既に三十年近く此體育の一事貫行をせられてゐるのである。目下氏の體育は單に冷水浴だけではない。時候のよい春夏秋は元よりのこと、北風膚をつんざく嚴寒の曉にも、山陰の雪をかきわけ凍氷を砕いて、釣瓶の水をザブリ〜と頭上より浴びること數杯、其後身體の濕氣を拭ひとると共に、乾いたタオルを以て、ウンと全身を摩擦されるのである。其摩擦が又驚くべきもので、毎朝千八百回——一ヶ所を百二十回づ

十五ヶ所——擦られるのである。而もそれが終つてから、尙氏特獨の裸體體操を行ひ、かくて後始めて衣を着して、天地の神明に御拜し、御拜終つて、朝の讀書にとり掛られるのである。最初の冷水浴より數へると、ごんなに早くとも三十分はかゝるが、氏は未だ一日も此順序を亂された事がないのである。

上地氏は精力主義の權化である。單に女學校の先生であるばかりでなく、併せて鳥取市の附近に在る、湖山神社の神官として、神明に奉仕せらるゝ役目がある。加之氏は社會教育の熱心家で、優秀なる幻燈器（此幻燈器も氏の熱誠に感じて、或特志家の寄附せられたものである。）を携へて、暇ある限り自分の郷里を中心として、四方の請に應じて出張講演し、殆んど寧日無きの状態に居られるのである。然も其體育によつて身體は至極強健で、年が年中四六時中、愉快と感謝の念に満たされ、麥飯粗菜も山海の佳肴珍味に勝るといつて居られるのである。前述の如き氏が晝夜を分たぬ連續不斷の活動は、全く此體育の源泉より湧出づる精力に、外ならぬと思ふのである。



我國では、古くは貝原益軒、伴信友の如き體育實行者があり、下つては黒住教の開祖黒住宗忠だの、八十五迄冷水浴を續けた根本通明氏などがある。又現在では百二十五歳迄生きると言ふて居られる大隈侯や、冷水浴を千八百回の摩擦と裸體の體操とを自適強健術として一貫してゐる、我上地直永君の如きがある。弱い人も強くなる事が出来る。強い人は更に其精力を高める事が出来る。若さも老いたるも、男も女も、各々自己に適する種類と方法とを選択して、一事實行の體育を是非實行せられんことを希ふ。

(七) 池田文一郎、山内利右衛門兩氏の禁酒斷行。

池田氏は秋田縣仙北郡の人で、大正九年に私が同郡の夏期講習會に講師として聘せられた時は、郡の聯合青年會長をして居られたのである。同氏の家は非常な富豪で、何でも人傳に聞く所では、毎年米が數萬俵も這入るといふことである。現に家の子郎黨の如き百數十人を抱へてゐるのに、まだ毎日百人近くの人が入出してお庭の掃除、草とり

其他の雜用に當ると云ふ、驚くべき生活狀態である。けれどもそれはたゞ單に池田家一家の榮耀榮華の爲めと云ふのではなく、古來それによつて、村内無財産者の生活を保障するの意味に出で、居るのである。

が文一郎君は、此の如き大家にあり勝な、所謂お坊ちやん式、若旦那式の人ではなかつた。先天的に偉大なる體格、美しき性格を持つて居られるにもかゝらず、尙ほそれに満足せず、常に體育修養に心掛けらるゝ、今の世、實に稀に見るの青年紳士である。けれども同君には、それだけの心掛けを以てしても、尙ほ一つ未だとり切れぬ缺點があつた。それは大に飲むことである。宴會などで、多くの人からさされる時は、まゝ斗酒尙ほ辭せずと云ふ大酒豪ぶりを發揮せらるゝことさへあつたのである。古來酒の爲に身を誤り産を覆へした人は、高位高官の方々にも、智者賢者の人々にも尠くないので、親の心配はたゞ此文一郎君の、酒を飲むことにのみ集つてゐたのである。

然るに此池田氏は、大正九年の夏私の一事實行主義に共鳴して、好期逸すべからずと



なし、勇奮一番、誠に男らしく此酒を思ひ切つてしまつたのである。處が何處の里にもある習ひで、禁酒を聞いては感心するよりも笑ふ人の方が多かつた。「どうせ三日位だらう。」といふ人もあれば、「長く續いて一週間位だらう。」と評する人もある。或は「金は無いぢやなし、何を苦しんで好きな酒を止めるのか。」と嘲ける人もあつた。が此池田氏は、世にありふれた薄志弱行のお坊ちやんとは其選を異にしてゐた。一度禁酒を斷行するや、絶對に再び盃を手にする様なことはしなかつたのである。

池田君の禁酒斷行を見て、誰よりも深く喜ばれたのが其父君である。「酒の爲に若し誤を起すやうのことがなければよいが」と、口にくそ言はね、心の底ではたえず心配でくならなかつたのが、斷然禁酒され、而も其禁酒の續く様子を見て、喜ばれたのも道理である。そして父は、一日我子に言ふ、「愛する子よ、お前ばかりに苦勞はさせぬぞ。よく酒をやめてくれた。私も今日からお前と共に、其苦しさを願つであらう。」父君は其日から、好きな煙草をやめられたのである。子は更に感激した。然るに御主人二人が禁酒禁

煙の實行を見て、他の人々が平氣で居る譯には行かぬ。池田家の人々は總務の曲木氏を始として、それ々に皆一事貫行の禁廢にとり掛つたのである。又家の外部では、文一郎君の親友が眞先に酒をやめ、近隣相ついで禁酒したもの、丸一年後の今日では、既に數十人の多きに及んでゐるのである。

或夜池田氏は、盛んに酒を飲んで酩酊した夢を見た。夢とは知らぬ同君は「あんなに堅く誓つて置き、而も今日まで美事に續けて來たに、今日になつて不覺にも、あの誓を破つたとは、マア何といふ情ない事であらう。」思ふと涙はどめ度なく流れた。冷たい涙が頬を傳ふて、枕を濕したので目がさめた。目がさめて始めて夢であつた事が分り、「ホツ」として、「マアよかつた」と安心したと言ふことである。池田氏は禁酒の一事貫行に成功して、大正十年の正月より、更に第二の一事貫行たる禁煙にとりかゝり、今は既にそれにも成功してゐられるのである。一事を貫く意志の力が、やがて萬事を貫く意志の力となつて、物質的の寶に富んだ池田家は、更に年一年と精神的の寶を加へて行かれ



るので、何がめでたいと言つても、物心兼備のお家繁昌、本當にこんな芽出度い事はな  
いと思ふ。

禁酒のことを述べると當り、尙一人讀者に知らせたい人がある。それは山内利右衛門  
君と言つて、岐阜縣土岐郡明世村の人である。名のみを聞くと老人らしいが、實は三十  
歳をまだ多くは越さぬ青年の方である。山内君の家は先祖代々酒豪であつて、同君も若  
い時から之を好み、既に病膏盲に入らんとしてある際であつた。丁度其時岐阜縣第一回  
の地方改良講習會があつて、山内君は選ばれて其講習に出席したのであるが、酒飲む  
癖こそは有つたけれ共、外に之ぞといふ缺點は無く、平素は至つて眞面目にして、且つ  
内心頗る熱に富んだ同君は、一事貫行の講演を聞いて、全く長夜の夢より醒めた様な心  
持、歸ると直ちに其趣旨を里人郷友に物語り、自分は正八年四月十八日、自己が第三  
十三回の誕辰を紀念として、深く酒てふ惡魔との交際を斷つたのである。其時に同君は  
左の如き一事貫行の誓を、印刷して知友の間に配つたのである。

一事貫行の誓

吾家累代酒と親しむ爲に、天命を全くせし者殆んど無しと言へり。乃父亦  
之が爲に其壽を保つ能はず、加ふるに予は幼時父の膝にありて、請ふが儘に  
杯を與へらる。長じて今日に及び、酒量彌々加はり、狂醉幾十回なるを知  
らず。嘗に身を害へるのみならず、徳に悖り罪を構ふること多し。悔悟幾度  
禁酒を企つ。而して薄志遂に之を繼續することを得ざりし。  
今春適々本縣第一回地方改良講習會の開催せらるゝや、偉人山下先生來  
りて講座を擔任せらる。予親しく其教を受け、豁然として人生の意義を悟り、  
湧然として過去の罪禍を悔ゆ。茲に於て予は誕生第三十三回の紀念日を以て  
禁酒の一事を貫行することを誓ふ。毀譽褒貶固より辭する所にあらず。冀く  
ば辱知の諸彦微意を諒解し、援助を賜はらんことを。

大正八年四月十八日 (第三十三回誕辰)

山内利右衛門



かくて山内君は、禁酒宣誓の烽火を擧げて立つたのであるが、當初は随分嘲笑罵詈の聲高く、一時は其熱心を曲解し憎悪して、「氣狂」の渾名をさへ附けられた者さへある程であつた。然しながら「人多ければ天に勝ち、天定つて人に勝つ」とか言ふ通りで、遂に山内君の至誠人を動かして、續々禁酒會員の數を増し、今では「氣狂」所か感心せぬ者は一人もなく、恐らく遠き將來に於ては、若き日の「氣狂」の渾名を變して「聖人」の美名に換へるの時が有らうかと思はれるのである。

池田君山内君の如き我が同志は、東西南北の各地に在つて、孰れも主義の爲道の爲に一時の恥を忍び辱を忘れて、勇進健闘して呉れてゐるのである。若し我讀者の中、一人でも酒や煙草の外敵に圍まれてゐる人が有るならば、上にあげたる兩人の勇氣に倣ひ、池田君山内君の如き志士をば我兄とし我友とし又我鑑として、直ちに禁酒禁煙の斷行に着手して下さい。鐵は必ず赤き中に打たねばならぬ。好機は一度逸すれば、又何回も巡り來るものではない。我勇士宜しく此今日を捕へよ。決して明日ありと信ずること勿れ。

(八) 上榭仙藏氏の家計簿。

鳥取縣東伯郡上灘村に、上榭仙藏といふ六十二になる老翁がある。此老翁早く年少の十七にして一家の主人になつたのであるが、平素の勤儉力行は言はずもあれ、人にすぐれて感心な事には、其主人になつた十七の年より、六十の坂を二つも越した今日迄、前後四十五年の久しい間、あらゆる一家の收支を、すべて各項目にあてはめて、厘毛の微に至るまで整然として家計簿に記入し、未だ一回も之を怠つた事はなく、尙今後十年間の帳簿まで出來上つて、其記入される日を待つてゐるといふ次第である。家計簿の如きは、新しき世の教育を受けて來た主婦さへも、中々記入しとほせぬものであるに、まして男子として、而も十七の青年時から六十二の老年時まで、終始一貫之を行ふたばかりでなく、尙今後十年分もチャンと出來上つてゐるに到つては、實に感心の外は無いのである。日誌類も、つけかけて長つゞきのせぬ人は、上榭翁の家計簿に恥ぢて、直に改む



べきである。

既に上樹氏はそれ位の熱心家であるが故に、家運日と共に繁榮し、今では村でも、第一流の資産家になつて居られるのである。先頃氏はすつかり家の事を令息讓次氏に譲り渡し、自分は餘生を捧けて社會奉仕の事に當り、自村を始め縣下所各町村に、我が大成協會が主張する、家産財團造成組合を興すべく、熱中して居つて下さるのである。之れ實に人間の、『理想的生涯』といふものである。

凡そ人間は、生れてから死ぬる迄、一身一家の事にのみ、醒醒してゐなければならぬ様では宜しくない。若い時には宜しく身を粉にして、家の爲身の爲に働くもよからうが最早六十以上にもなれば、身自らは家の事から離れても、一家の生計には何の差支もない様にし、そして我身は國の爲村の爲、もらふ報酬を度外視して、仕たい仕事をする様になりたものである。我等はかゝる人を稱して、「名譽公民」といふのである。我が上樹仙蔵氏の如きは、正に此名譽公民の好模範であると思ふ。

### (九) 名和靖君の昆蟲研究。

何人も、岐阜公園を訪れた人は、忘れ難き二つの記憶を残すであらう。其一は明治の元勳で、自由黨の總理であつた板垣退助伯が、刺客の爲に傷けられた、其土地に建つ記念碑である。『板垣死すとも自由は死せず』といふ有名なる句は、此處で刺された其利那に、伯の口を迸り出た平生の信念である。又他の一つは、其建築物必ずしも宏壯といふにはあらね共、内に入つては集められた昆蟲の多きに驚く「名和昆蟲研究所」である、吾人は平生「一人一研究」なるものを到る處で主張してゐるのであるが、此研究所程に成功したる「一人一研究」は不幸にして日本には甚だ乏しく、先づ之に比肩すべきものを求むれば、それは京都の平瀬貝館位のものであらう。

此處に述べんとする名和昆蟲研究所は、現在の所長名和靖氏の建てられたものである。名和氏は實に貴重なる其一生を、昆蟲研究の爲に捧げられた偉人である。氏が昆蟲研究



の興味は、明治十一二年の頃同氏が岐阜市の農事講習所（後に改稱して、岐阜縣農學校となる。）に、生徒として學習してゐた頃から、始まつたらしいのである。同校卒業後、縣廳は貳拾圓の高給（當時貳拾圓はかなりの高給であつた）を以て迎へたにも不拘、氏は縣廳に行けば、恐らく自己志望の昆蟲研究に便宜少からんを憂へて、之に行くことを欲せず、其半額の拾圓を得、甘んじて農學校の助手となつたのである。爾來同氏の農學校に在ること十年以上、中等教育者の免許狀を得ては、助手より進んで教員となられたのであるが、氏の名聲の高くなると共に、種々なる所より二倍三倍の高き地位俸給を以て聘する所多かつたが、其道の研究に不便ならんとて、一切之を謝して應せず、身常に粗服を纏ふて、屢々小使と見違へらるゝ事あるも敢て意に介することなく、全く名利榮達の念を超越して、一意専心、國利民益の爲に昆蟲の研究に没頭すること前後三十年、常に山野を跋涉して捕蟲網を振ひ、或は遠方に出張し、或は學校研究所内に害蟲益蟲を飼育し、かくて今は、押しも押されぬ日本一の昆蟲學者、——それも通り一遍の

机上の學者ではなくて、一步一步實地の經驗觀察から築き上げた、随つて純正昆蟲學のみならず、進んで山林、農作、建築物等に裨益する事の大なる、『應用昆蟲學』の大家である。

然るに此三十年の久しい間、名和氏には研究の志餘りあつて、經費の出所之なきが爲に、自由自在に其雄志を延し得なかつた事が多く、殊に明治二十四年の濃尾大地震の時には、家は倒壊して妻子は負傷し、且つ其時迄幾多の苦心を経て採集した標本は、過半其爲に滅茶苦茶になつて、其不幸實に目も當てられぬ有様であつた。然るに氏は、此不幸に聊かも喪心することなく、不幸に遭ふや益々其志を堅くして、徐ろに他日の大成を期されたのである。

氏は研究の必要上、明治二十九年に農學校の教職を辭して、岐阜市京町に、私立昆蟲研究所を建て、後明治三十七年に、今の公園内に移轉されたのである。今日では、集むる所の昆蟲標本一萬數千種に達し、其價格亦拾數萬圓に上る。明治四十一年には韓國皇



太子殿下、翌四十二年には、我が皇太子殿下に、閑院宮殿下の御臺臨遊ばされしを始  
 として、碩學大家の駕を枉げて見學せらるゝ事夥しく、又内外の博覽會共進會等に  
 於て、賞牌を受領せられたるも、幾度とも數知れず、内國に於ては勿論、コロンボの世  
 界博覽會で優等賞、巴里萬國博覽會で銀牌、セントルイス、シヤトルの各萬國博覽會で  
 金牌、日英大博覽會では名譽大賞を受けられた様な次第である。氏が其學生時代に抱い  
 た志に殉じて、今日迄千障萬難を排して奮闘せられた事蹟の一般は、明治三十四年、  
 賞勳局より藍綬褒章を授けられた時の、其褒記によつて明かであるから、左に之を轉  
 載するのであらう。

日本帝國褒章之記

岐阜縣美濃國本巢郡船木村

名 和 靖

資性堅忍夙ニ農學ヲ修メ、尋テ動物學ヲ練修シ、專ラカヲ昆蟲學ニ竭シ、害

蟲驅除益蟲保護ノ法ヲ究メ、之ヲ農業及教育上ニ應用普及スルヲ以テ己レカ  
 任トナシ、常ニ山野ヲ跋涉シ、艱苦備嘗、蟲類ヲ採集スルコト一百二十餘萬頭、  
 標本ニ製作セシモノ凡ソ八十餘萬頭、之ヲ内外博覽會ニ出陳シ若クハ諸學校  
 各種ノ團體ニ寄附シ、或ハ各地ニ巡歴シテ農會其他ノ諸會ニ於テ講演スルコ  
 ト六百有餘回、數々講習會ヲ開キテ多ク生徒ヲ教養シ、月刊雜誌及害蟲ノ圖  
 解ヲ發刊シ、殺蟲器捕蟲器益蟲保護器ヲ按出シ、若クハ害蟲標本保存筐ヲ改  
 良スル等、闡示開導甚タ努メ、裨益ヲ農家及教育家ニ與フルコト鮮少ナラス、  
 洵ニ公衆ノ利益ヲ興シ成績著明ナリトス。依テ明治十四年十二月七日勅定ノ  
 藍綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス。

明治三十四年五月十四日

名和氏の、三十年一日の如き、不屈不撓の研究によつて、農家、鐵道院、古社寺、古



木等が、浮塵子、白蟻等の害を免れ、更に又益蟲の保護利用によつて、一般人がこれだけの利益を得たかは、眞に計り知るべからざるものがある。同氏の如き熱心強意の研究家を有するは、實に我等の幸福及び好模範たるのみならず、實に又我國の名譽である。我等が唱ふる一事貫行の大威力が、物事の研究に向へば、正に名和氏に現はれた如くなるのである。此大自然の廣大なる、天覆地載の間に於ける森羅萬象を見れば、我等が一生の精根を捧げて、之が研究に従ふべき事柄は幾らでもある。吾等は第二第三の名和氏の如き熱心家が、多々益々輩出して國利民福を増進せられんことを、願ふて止まざる次第である。

(110) 修養團の創設者蓮沼門三君

「萬里の境に到るには、千山萬水を越えねばならぬ。一步一步と歩まねばならぬ。今日十里を歩み、明日亦十里を歩み、雨降るも歩み、風吹くも歩み、歩み歩みて、野を越

え山を越え、霞を分け霧に入り、百里千里と行く程に、前途漸う近くなり、希望の光も輝き來り、氣は益々勇み、足は愈々軽くなる。斯くて遂ひに萬里の境に到ることが出来る。

山を厭ひ、水を厭ひ、雨風を厭ひ、寒暑を厭ふて、歩むを怠り、或は晝夜兼行して、根疲れ精盡きて、絶望の溜息を吐く様では、いつの日にか萬里の境に入ることが出来やう。千段の高樓に登らうと思ふなら、必ず千段を踏まねばならぬ。段々と上りて止まぬ時、始めて高樓の人となれる。徒らに大言壯語を吐くよりも、座して登樓の妙法を説くよりも、先づ足を擧げて一段を上げ、二段を上げ。上れば上る程希望の光は輝いて來る。」

之は修養團主幹、蓮沼門三君が「希望の光」と題する文章の一節である。蓮沼門三君其人は、全く此文章に示されてある通りの道を、實地に歩んで來た人である。

東京市淺草區藏前に其本部を有し「同胞相愛、流汗鍛練」の旗印を翻して活動して



ある修養團は、我日本の青年善導志士結束の、一大機關である。前の會計検査院長田尻子爵を團長とし、澁澤子爵森村男の兩實業家を顧問として、全國會員の數、今既に七萬以上、尙駁々として發展の途上に在るのである。

會員數萬を有する此修養團も、決して一朝一夕に發達したものではない。今の主幹連沼氏が、明治三十九年の紀元節に、時弊に憤慨して初めて此修養團を組織した當時は、僅に結束の同志數人に過ぎなかつたのである。それが一生懸命に奮闘して、漸く百名計りの會員を得る様にはなつたが、幹部の人達は大抵學生若しくは薄給の人々であるからお互の財布の底をはたいても、修養團發展に用ひるべき金はなく、會費も一ヶ月一人が五錢だから、壹錢五厘のハガキ一枚を買へば、あとの費用は參錢五厘、百人の會費を合せた、所で參圓五拾錢しか無いのである。連沼氏は當時師範學校を出た小學校の先生であつた。東京飯田町の何某なる家の二階を借りて、こゝが居所でもあり、又雑誌の編輯所でもあつた。雑誌といつても、當時の雑誌はお互が筆を執つて書いた、其肉筆のまゝを

纏めて回覽したものである。後稍それが發達しては、謄寫版を附近の學校で借りて來て、印刷したものになつた。當時の様子を連沼氏は述べていふ。

『(前略)然し至誠曇りなき青年は、肝膽を披いて相語り、我等が對話中も、封筒を張つたり紙燃をよつたりする骨折を見ては、大に感激し、悦んで發送も手傳つて呉れ、進んで筆記の清書もしてくれ、一見舊知の如くなるのであつた。現在でも修養團の財政は困難であるが、此當時は、壹錢五厘の金が惜しかつたので、端書一枚の力が、九州の果の青年、北海道の奥の志士をも奮起させるかと思へば、逆も飯食會に五拾錢も壹圓も費すことの出来る沙汰ではなかつた。友人の宴會などには一度も出席せぬ故、吝嗇な男と思はれたのは當然であつた。云々』

かゝる困苦の中にも、連沼氏の熱誠と努力とは、人を動かし功を奏して、其善化運動はだん／＼擴大して來たのであるが、それでも大正三年には、漸く三千人の會員を得、大正六年に至つて、とう／＼四千人を數へたるに過ぎなかつたのである。然るに大正八



年頃より、社會の要求と内部の充實とは相合して、急速に修養團の發達を促し、大正九年の如きは、年初二萬の會員に過ぎなかつたものが、年末五萬を算するに至つたのである。今に於て卒然之を見ればこそ、蓮沼氏の努力は完全に其報ひを得たが如くであるけれども、而も此大發展を遂げる爲に、苦心十年、其身の衣食さへも十分ならざる逆境に立つて、斃れず撓まず、急がず逸らす、

雨注ぐ軒の下石くばみけり、難き業とて思ひすてめや。

末遂に海となるべき山水もしばし木の葉の下くゞるなり。

の歌の心を身にしめて、自重堅忍、世には知られぬ活動をして來られたを思はねばならぬのである。其お蔭で今日の大勢力が造られたのである。能く忍ぶ者は勝つ。耐え忍ばざる者に、眞の勝利の有り得た例はないのである。「踏まれても根強く忍べ道芝の、やがて花咲く春もこそ來れ。」此辛抱が大切である。我等の尊敬する友人蓮沼君の如きは、嘗に其清廉熱誠の心事に於て衆庶の模範たる所多きばかりでなく、又其堅忍不拔、一度立

てた志は、最後までやり通さねば止まぬといふ、我「一事貫行」の主義實行者として、得難き手本を示された者である。尙斯の如き事例は數多くあるが、吾人はこれで、「一事貫行者古今十數人の模範實例」を擱くであらう。而して其擱筆に當り、我が親愛なる讀者諸君が一筆上人以下、此蓮沼門三君に到るまでの、各勇士の事歴を深く心に感銘して、とりぐに自己の本領を發揮し、又自己の習慣を改造する、模範とし龜鑑とせられんことを熱望するのである。

### 第十章 須く一事貫行に着手せよ。



唱ふる者よりも  
和する者は大也。

前九章に亙つて、吾人の述べた一事貫行の必要と、及び最後に吾人の擧げた、古今十數人の模範的實例とは、大なり小なり、必ずや讀



者の心を動かす。其胸奥に込み込んだ事であらう。高いと低い、強いと弱いとの相違はあつても、全然讀者の琴線に、共鳴の響を發せざることは無かつたであらう。其共鳴が大か小か、高いか低いか、強いか弱いかの差別は、打つ方よりも、寧ろ打たるゝ方の素質如何によるものである。平素熱心に自己改造を欲し、善美の行ひに進みたいと願つてゐた人には、高く強き共鳴を喚び起したであらう。又之とは反對に、克己向上の興味少く、奮闘努力に些かの注意しか拂つてゐなかつた人々には、極めて微弱な感觸を與へたに過ぎぬであらう。若し諸君にして、本書が呼び起した感奮興起の大小を反省せらるゝならば、之れやがて自己の善心悪心の、大小を計る度量衡たるであらう。凡そ講演でも著述でも其が與へる効果の大小は、主として讀む人次第聽く人次第である。弱く響くも強く響くも、讀む人聽く人の、價値如何によるのである。撞く人の力の大小も、無論音の大小に關係はあるが、それよりも寧ろ、打たれる鐘の良し悪しによつて、響の大小を生ずるのである。故に尊いのは、共鳴した人の心である。若し讀んで呉る人に其要素がなけ

れば、幾ら論じても論しても仕方がない。之れ吾人が「唱ふる者よりも和してくる人を以て、より大なり。」とする所以である。

吾人が各地に於ける一事貫行の講演は、非常の感謝感激を以て聽かれるのが通例である。恐らくは此書も亦、幸にして講演同様に、多くの共鳴者を得た事であらうと思ふ。「成程さうだ、其通りだ。我が行く道は定つた、要訣は分つた、之に従つて是非やらう何でもかでも貫いてみせう。」と、竊に決心覺悟の臍を固められた人々も、決して少數ではないだらうと思ふである。



好機逸すべからず。

感激の其時こそ大切である。感奮の其折が尊いのである。鐵は必ず赤き中に打つべく、其機を逸してはならぬ。好機は何遍も來るものではない。善いと知つたら一時も早く、其仕事にとり掛らねばならぬ。「知即働」「觀念即行爲」で、來月と言はずに今月から、明日を待たずに只今から、即時即刻に着手しなければならぬ



のである。折々煙草を吸ふ人などが「此一箱を吸ふてしまつてから止める」とか、酒を飲む人が、「残りの酒を飲んでしまつてから禁酒する」とか言ふが、それでは未練が多すぎる。かくの如くして、やらう〜と思つてる中に、いつしか熱が冷めてしまひ、熱が冷めれば勇氣はなく、とう／＼斷行せずして終る様な人が多いのである。前にあげた山内君の禁酒などは、氏の誕生日から行ふたが、あれらは即時即刻に實行してゐて、たゞ世間に對する發表を、誕生日に延された迄のことであらうと思ふ。熱慮斷行もよい事だが、熱慮と未練とは同一ではない。やるだけの勇氣が無くて、グズ／＼してゐるのは熱慮ではない。やる爲の選擇、やる爲の工夫、やる爲の考慮が即ち熱慮でなければならぬ。

讀者にとつて、一番大切なのは今である。此書の最後の一章を讀み終る時の暫時である。あゝ「讀んだ。」と言つて、すぐ本を閉ぢて机の隅へ押しやる様では、讀んだだけの甲斐はない。「いゝ本を讀んだ。いざ我輩も何々をしやう。」と、すぐ自己の實行事項を決定するのだから駄目である。諸君願くば其一事を執れ。執つて以て有終の美を濟す

所まで實行せよ。



一事貫行  
誓約書

普通私等が、講習會に出席した場合には、一事貫行の講演を終ると共に決心の出來た人には、直ちに「一事貫行の誓約書」といふものを、書いて貰ふことにしてゐるのである。誓約書といふのは、

『私は自己改造の第一歩として、必ず左の事項を實行いたします。』

といふ文章と共に、その人の姓名職業年齢と、其實行事項とを一枚の紙に書いたものである。

無論此誓約は、紙には書くが、他人に誓約するのが主ではない。第一には神明に約束をするのである。第二には自分で自分に誓ふのである。私等は外部より、かゝる形式的の誓約を、他人に強ひやうとは思はない。強ひた所で効はない。すべて眞に徳を建て事を成す人は、自發的にやるのである。そして此自發的の人は、天に對して責任を感ずる



のである。たとへ他人を偽ることは出来ても、神と自己とは絶対に欺く事は出来ぬ。吾人の誓約は、須く此絶対に欺く能はざる者に向つてせなければならぬのである。

尙一言こゝで注意して置くが、世の中には、時々止むなき事柄も起るのである。而して其止むなき事柄の爲に、一日なり暫らくなり、其貫行事項を中止する事は、決して恥辱ではないのである。若し或人が、冷水浴の一事貫行を始めたならば、死ぬ様な病になつても、之を中止してはならぬのだらうと思ふならば、それはいみじき誤りである。貫行は拘泥することではない。神も許し自己の良心も許す所の例外は、決して薄志弱行の罪咎ではないのである。親の危篤の場合には、讀書も静座もあつたものではない。一事貫行は、そんな時にも無理強ひをしやうとはせぬのである。一事貫行を一名無例外主義と言ふのは、自己の怠惰や、不熱心や、臆病から来る、一切の例外を許さぬといふ意味である。



一事貫行  
點取表

扱愈々決心が定まり、或は誓約書をも認めて、すでに一事貫行の實行に取り掛れば、可成は「點取表」をつけるがよい。十分意志の強固な人には、誓約書も點取表も無用であるが、思ひの外に人間の意志は弱いもので、雄々しく立てた志が、途中で撓む事もあり、或は堅く貫く決心で居ながらも、フとした不注意から、定めを破ることもある。さうした時には、必ず他から之を誠めて呉れるだけのものがなければならぬ。此點取表は、即ち此時に我を誠める師匠である。黒い丸は不注意怠惰の證據であり、白い丸は忠實勤勉の表示である。一日一日、惡を斥けて善に附けば、いつか小積んで大となる。一日は一生の縮圖である。悪しき一日を重ねて善き一生を得ることは不可能である。かくて此一日此一日の成績は、やがて驚くべく偉大なる成果を齎すことになるのである。只今我大成協會で用ひてゐる點取表は、左表の如き形式のものである。



表取星行事貫一

入行横ヨヨ行貫

入行貫ヨヨ行致

月	行事貫												日	月	年	大正	日	年齢	職業	名姓所住									
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二																	
月													17																
月													18																
月													19																
月													20																
月													21																
月													22																
月													23																
月													24																
月													25																
月													26																
月													27																
月													28																
月													29																
月													30																
月													31																
月													合計	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

黒かねのまど射し人もあるものを貫き通せ大和魂

一事を貫く意志の力は萬事を貫く意志の力なり。

東京東口 第五九八二番 大成協會 丁二町月江町見伏府東京

勇ましく〜  
登つて下さい

親愛なる讀者よ、第八章の一事貫行百例に照し合せて、どれか一つを直ちに決心して下さい。今です、只今です。運命の神が君に向つて立つて

ある此時です。時を失つてはいけません。一度失つた時は、再び歸つては來ないのです。木下中佐の如く、影山茂樹氏の如く、或は池田氏山内氏の如く、及び他の幾十萬の同志の如く、直ちに決心して下さい。直ちに着手して下さい。感謝感激の熱のさめない其中に、反省悔恨の情の動いてある其間に、猛然として立つて下さい。敢然として進んで下さい。今が尊むべき一瞬です。今日が尊むべき一日です。長き千代にもかへ難き、新生の、自己改造の第一日が今なのです。

定まつた上では、功を急いではいけません。急いで事は仕損ずる世の響。急ぐからして飽くのである。急ぐからして倒れるのである。「蝸牛をろく〜登れ富士の山、」其調



子で行くがよい。腹の底を据え、ウンと氣を落付けて、悠々又堂々と行かねでならぬ。「嶮山に登るには當初緩歩を要す。」とセキスピアが言つた。「天行健、君子自疆して息ま

ず」と易經の中にも書いてある。

くろがねの的射し人もあるものを、貫き通せ大和魂、

とる棹の心ながくもこぎよせん、蘆間の小舟さはりありとも、  
右は、明治天皇の御製である。アダムの有せし所、及びシーザーの成し能ひし所は、我等も亦之を有し、之を成すことが出来るのである。必要なのは忍耐である。大切なのは強意である。たとへ讀む人は多くとも感激する人は少く、感激する人は多くとも着手する人は少く、着手する人は多くとも十分に終を完うする人は真に少いのである。實に残念至極の事である。之ではいかん、之ではならん。讀んただけでは効がない。感じたゞけでは能がない。必ずや之を執り、之を守り、之を遂げなくてはならぬ。遂ぐるが即ち勝利である。勝利を得よ、勝利を得よ。勝利の榮冠は忍耐者の頭上に在る。勝利の峯に

登る靴は強意である。やつて下さい、やつて下さい。腕競べでなく根競べで、一日一日と決めた一事を貫いて下さい。無論大なり小なりの辛苦はある。どうせ辛苦は覺悟の前水火を恐れず、白刃をも辭せず、一生懸命進んで下さい。堅實徐々と登つて下さい。唱ふるお経は一事貫行、守る掟は一心不亂、修養の山、成功の峯、「強・能・善・富」とりくくの針葉樹潤葉樹で、鬱々として包まれた其神々しき神殿まで、いざ只今より出發しませう。いで今日より登りませう。道は既に開けてあります。先に進んだ先達は幾らもある。續く同行後進も無數にある。自愛せよ同志、奮闘せよ勇士。凱歌まで！凱歌まで！さらば諸君、勇ましく登つて下さい。いざさらば、諸君！

一事貫行眞髓 (終)



## 後序

終に臨んで、一言を添へたいと思ふ。それは諸君に、「此一日」を立派にしてもらいたいと言ふ事である。我が「一事貫行」の歸趨は、既に幾度か述べたる如く、縦には一事一事の精髓を極めて、全體の眞理、生命、根底を掴み出すことであり、横には此一日此一日を立派にし、眞面目にし、遺憾なきものにして、全生涯を光榮の歴史に満たしめやうとするのである。一事は全事の雛形であり、一日は一生の縮圖である。朝に迎へて夕に送る此一日此一日を立派にせずして、價値ある一生光榮の生涯を建てる事は出来ないのである。零は幾ら多く積み重ねても零である。無爲無能無善無益の一日を、如何に多く繰返したとて、價値ある生涯は造れないのである。眞に汚れなき一日、眞に生き甲斐ある一日、進歩の一日、努力の一日、感謝の一日を



送つてこそ、誠に高貴の一生と言ふべきである。彼の道元禪師の『修證義』にも、『謂ゆるの道理は、日々の生命を等閑にせず、私に費さざらんと行持するなり。光陰は矢よりも迅なり。生命は露よりも脆し、何れの善行方便ありてか、過ぎにし一日を再び還し得たる。徒らに百歳生けらんは、恨むべき月日なり、悲しむべき形骸なり。假令百歳の月日は、聲色の奴婢を馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり。此一日の生命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり。此行持あらん身心、自らも愛すべし、自らも敬すべし。』と謂はれてある。眞に此お訓の通りである。

願くば諸君、『此一日を』立派にすべく、日々の努力を積み重ねて下さい。此一日が本である。此一日が命である。『世の中に一日の外は無かりけり、昨日は過ぎつ明日は知られず。』私等はたとひ此生命此瞬間に亡ぶとも、外には人の嘲りなく、内に

は心の煩なき、聖純潔白の一日一日を重ねなければならぬ。『今日を限り今日を限りの命ぞと、思ひて今日の勤めをばせよ。』『けふもく無駄に過して明日くど、言はゞ千歳も空しからまし。』彼の不純の徒、荒怠の輩、『今日は特別だ』とて酒を飲み、『若い時は二度ない』とて不品行をし、『此場合は止むを得ぬ』とて嘘を吐き、斯の如くにして尙且最後に光榮の一生を得んと望む者もあるが、こは恰も一個一個の煉瓦や石の積み方を粗かにして、而も宏壯堅實なる建物を築かんとする様なものである。眼に高遠の理想を望むは、萬人にとつて必要なことであるが、然し之が實現を期せんとせば、足常に咫尺の歩を続けなければならぬのである。一年三百六十五日、春も、秋も、繁忙の日も、閑散の日も變りなく、朝に起ち夕に省み、誓約を思ひ探點を行ふて、此一日此一日を、立派に送らねばならぬのである。

繰返して言ふが、我が一事貫行の歸趨は、『一』より起つて、『全體』を良くする事



である。「一」に徹底して「全體」に徹底することである。若し口如何に高遠の理想を説くと雖、日常の生活に於て、「此一日・此一日」を立派にせやうとせざる者あらば是れ決して我黨の士では無いのである。そは邪宗門徒である。異端の輩である。親愛なる諸君よ、ごうか御身を強壯にして、此一事此一事に奮闘し、此一日此一日に努力して下さい。終に臨み、我が貫行主義の眞髓たる『此一日主義』の要旨を述べ、重ねて諸君の勇猛精進を希望する次第である。

大正十年秋

著者

# 大成協會

## □ 社會教育の權威

- 青年團處女會の指導に當る。
- 思想問題社會問題の善導に従ふ。
- 民力涵養地方改良の講演に出づ。

主幹 法學士 山下信義  
副主幹 京大社會學專攻 村田太平

- 人格修養の道を教ゆる懇篤。
- 家庭改善の法を説く周到。
- 町村發展の要を授くる適切。
- 善人同盟の機關

## 機關雜誌 大成

- 思想の堅實を以て鳴る。
- 内容の清新を以て聞ゆ。
- 記述の平明を以て喜ばる。
- 價格の低廉を以て迎へらる。

四六版四十八頁  
毎月一日發行  
一冊定價拾錢  
一ヶ年會費壹圓貳拾錢  
本部に申込み直ちに送る

京都府伏見桃山  
江戸町二丁目  
**大成協會**  
振替 東京二二八九五番  
口座



□ 書叢成大 □

兩主幹努力の結晶

□ 多年の研究  
□ 平易の記述

□ 人生の光明晃々として輝けり。  
□ 斷じて机上の空理空論に非ず。

大成協會 主幹 山下信義  
大成協會 副主幹 村田太平 共著

□ 深遠の學理を包む實踐の指導也。  
□ 健全幸福なる生活は茲に於て得らる。

各册總べて  
金玉の文字

□ 洋々たる希望  
□ 潑瀾たる勇氣

卷一第

富と人生

第四版發行  
定價金壹圓

卷二第

家産財團

第五版發行  
定價金壹圓

卷三第

一事貫行眞髓

新刊  
定價金壹圓

卷四第

立憲的家庭

大正十一年  
出版の豫定

卷五第

町村之歸趨

大正十二年  
出版の豫定

申込所 京府都 大成協會 振替口座 東京 一八二九番



503  
27



終